岡山大学構内遺跡調査研究年報 9

１９９１年度

１９９２年１２月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学埋蔵文化財調査研究年報９　正誤表

ページ	行　数	誤	正
例言	28～30		粉川昭平，能城修一，松谷暁子，三好教夫
7	11	層序と地形（図８）	層序と地形（図５）
9	12	ほぼ平坦となった地形返遷	ほぼ平坦となった地形変遷
10	図8	１～８＝，９＝	遺物縮尺１～８=1/2，９=1/4
21	15	大阪市立大学理学部教授	大阪千代田短期大学教授
21	24		④花粉分析--岡山理科大学教授 三好教夫 津島岡大遺跡（８次調査） ：各層土壌内包含花粉
22	17	岡山県立埋蔵文化財センター	神奈川県立埋蔵文化財センター
23	22	福永伸哉編	都出比呂志・福永伸哉編
24	左25	（～12月18日）	（～12月25日）
24	右17	12月27日	削除
24	右18	大掃除，御用納め	12月27日　大掃除，御用納め
42	2	野川・月見野両遺跡	月見野遺跡群
44	図15	５上草柳遺跡群 ６栗原中丸遺跡	５栗原中丸遺跡 ６上草柳遺跡
49	図20	茂呂系ナイフ糸石器	茂呂系ナイフ形石器

縄文時代土壙（津島岡大８次調査）

弥生時代末～古墳時代前期土壙（鹿田６次調査）

岡山大学構内遺跡調査研究年報９

１９９１年度

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

1991年度においては，鹿田遺跡第６次調査および津島岡大遺跡第８次調査の２つの構内遺跡発掘調査を実施しました。前者はアイソトープ総合センター建設にかかわるもので，前年度からの継続調査として，中世から弥生時代末～古墳時代初頭までの遺構面の精査を６月末まで行いました。７月末から開始した後者の調査には，農学部構内の遺伝子実験施設と合併処理槽建設地の２地点が含まれます。いずれにおいても，縄文時代後期あるいは弥生時代以降における旧地形の復元や水田・集落のあり方を知るための重要な手がかりを得ることとなりました。

発掘の終わった資料については遺物の整理作業等を順次進めていますが，今年度は1986・1987年度に実施した男子学生寮予定地の調査報告書を刊行することができました。

ところで，本学の鹿田キャンパス・津島キャンパスはいずれも沖積地にあり，発掘調査の際にしばしば木製品が出土します。弥生時代の農具，古代～中世の井戸枠や河道に打ち込んだ堰の杭などといったものですが，発掘で取り上げたあとの軟弱な木製遺物をいかに恒久的に保存していくかが従来から問題となってきました。さいわい1991年度においては木器保存処理施設が完成し，樹脂の含浸によって木製品の保存処理を行うことができるようになりました。精巧な作りの資料などは別途保存科学の専門機関に処理を委託することとなり，懸案であった出土木器の保存処理に一つの解決の道が与えられたことは，今後の構内遺跡発掘調査の体制の万全をはかるという面でも重要な意義があると思います。

発掘調査を円滑に実施するにあたっては，いつもながら岡山県教育委員会・岡山市教育委員会・学内関係学部や事務局のご協力を得ました。また木器保存処理の推進は，高重進・前センター長がとくに努力を払われた課題であり，その施設設置等にあたっては学長・事務局の格別のご配慮をいただきました。最後になりましたが，関係各位に厚くお礼申し上げますとともに，今後の変わらぬご指導・ご支援をお願いする次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長
稲　田　孝　司

例　　言

1　本年報は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが岡山大学構内において1991年４月１日から1992年３月31日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存，および活動成果をまとめたものである。

2　大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては，設定基準を次のように定めた。

1）津島地区では，国土座標第５座標系（Ｘ＝－144,500，Ｙ＝－37,000）を起点とし，真北を基軸とした構内座標を設置した。一辺50ｍの方形地区割である。また，同地区では調査の便宜上，大きく津島北地区と同南地区に二分する（図11～13）。

2）鹿田地区では，国土座標第５座標系（Ｘ＝－149,800，Ｙ＝－37,400）を起点とし，座標軸をＮ15°Ｅに振ったものを基軸とした構内座標を設置した。地区割は一辺５ｍの方形を用いている。(図14)。

3）本文中で用いる方位は，真北を基準とする。

3　岡山大学構内の遺跡の名称は，周知の遺跡の場合はそのまま踏襲する。津島地区構内については，全域を「津島岡大遺跡」と総称する。他地区は任意の名称で仮称する。

4　調査名称は，「発掘調査」に分類したものについては，各遺跡毎に調査順に従って次数番号で呼称し，「試掘調査など」に分類したものは，任意の名称を用いる。発掘調査のうち，小規模で，試掘調査から連続して調査したもの，試掘調査を経ず調査したものは，「試掘調査など」に分類する。

5　「発掘調査」についての記述は現段階における概要であり，精確な詳細は正式報告に依って頂きたい。「試掘調査など」については，本年報での記述を正式報告にかえる。

6　表に記載した所属部局は，原則として各学部の頭文字を略号として用いている。

7　本文・目次・挿図・写真などで使用の調査番号は表１と一致する。

8　本文は，阿部芳郎・土井基司・富樫孝志・松木武彦・山本悦世が分担執筆し，執筆者名は末尾に記した。

9　編集は稲田孝司センター長の指導のもとに，松木が担当した。

10　本年報に掲載の津島地区の地形図は岡山市発行の1/2500の地図を複製したものである。

11　調査・整理において以下の方々にご援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

伊藤晃，伊藤実，扇崎由，神谷正義，草原孝典，小森義尚，篠原芳秀，鈴木康之，亀田修一，橘田正徳，河本清，菅波正人，杉原和恵，高橋護，武田恭彰，土橋理子，徳永貞昭，中島恒次郎，橋本雄一，森内秀造，森隆，山本信夫，吉瀬勝康

岡山大学構内遺跡調査研究年報９　1991年度

目　　次

第１章　1991年度岡山大学構内遺跡調査報告 …… 1

1　調査の概要 …… 1

2　発掘調査 …… 1

①　津島岡大遺跡第８次調査＜遺伝子実験施設予定地＞ …… 1

②　鹿田遺跡第６次調査＜アイソトープ総合センター予定地＞ …… 11

3　立会調査 …… 14

(1)津島地区 …… 14

(2)鹿田地区 …… 14

第２章　1991年度普及・研究・資料整理活動 …… 21

1　資料整理 …… 21

2　分析依頼 …… 21

3　刊行物 …… 21

4　調査員の活動 …… 22

5　日誌抄 …… 24

6　1991年度までの遺物収蔵量および保管体制 …… 25

第３章　1991年度活動のまとめ …… 28

附　表 …… 29

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項 …… 37

1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定 …… 37

2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定 …… 38

3　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定 …… 38

1991年度埋蔵文化財調査研究センター組織 …… 40

1　センター組織一覧 …… 40

2　管理委員会 …… 40

3　運営委員会 …… 41

附　編 …… 42

挿 図 目 次

図１　津島岡大８次調査Ａ地点　土層断面図 …… 2
図２　津島岡大８次調査Ａ地点　６層下面検出遺構 …… 3
図３　津島岡大８次調査Ａ地点　６層下面～９層検出遺構 …… 4
図４　津島岡大８次調査Ａ地点　出土遺物 …… 5
図５　津島岡大８次調査Ｂ地点　土層断面図 …… 7
図６　津島岡大８次調査Ｂ地点　弥生時代の遺構と12 a,b 層における遺物分布状態 …… 8
図７　津島岡大８次調査Ｂ地点　12 a,b 層出土遺物(1) …… 9
図８　津島岡大８次調査Ｂ地点　12 a,b 層出土遺物(2) …… 10
図９　鹿田６次調査　７層上面遺構 …… 12
図10　調査９出土遺物 …… 14
図11　津島地区全体図 …… 17
図12　津島北地区 …… 18
図13　津島南地区 …… 19
図14　鹿田地区全体図 …… 20
図15　相模野台地における遺跡分布図 …… 44
図16　茂呂系ナイフ形石器の形態分類 …… 45
図17　栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層における茂呂系ナイフ形石器の属性 …… 45
図18　長堀遺跡群における茂呂系ナイフ形石器の属性 …… 46
図19　橋本遺跡第Ⅲ文化層における茂呂系ナイフ形石器の属性 …… 48
図20　中村遺跡第Ⅴ文化層における茂呂系ナイフ形石器の属性 …… 49

写 真 目 次

写真１　津島岡大８次調査Ａ地点　６層下面検出遺構 …… 6
写真２　津島岡大８次調査Ａ地点　６層下面～９層上面検出遺構 …… 6
写真３　津島岡大８次調査Ａ地点　縄文時代土壙 …… 6
写真４　津島岡大８次調査Ｂ地点　９・10層検出の弥生時代の溝（３～７） …… 8
写真５　津島岡大８次調査Ｂ地点　溝７下底面における足跡状痕跡の検出状態 …… 8
写真６　鹿田６次調査　中世の溝群 …… 11
写真７　鹿田６次調査　土器出土状況 …… 13

表 目 次

表１　1991年度調査一覧 …… 15
表２　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 …… 26
附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度） …… 29
附表２　1990年度以前の構内主要調査（1983～1990年度） …… 29
（１）発掘調査 …… 29
（２）試掘調査など …… 30
（３）立会調査 …… 32
附表３　埋蔵文化財調査室刊行物 …… 36
附表４　埋蔵文化財調査研究センター刊行物 …… 36

第１章　1991年度岡山大学構内遺跡調査報告

１　調査の概要

当センターにおいては，大学構内における掘削を伴う工事に際して，事務局施設部企画課を通じて事務手続きを行ったうえで，発掘調査・試掘調査・立会調査にわけて調査を実施している。

これまでのところ，その調査の対象は津島地区と鹿田地区とが中心になっている。とくに，鹿田地区は周知の遺跡（鹿田遺跡）として，掘削を伴う工事に際し，届出を提出した上で対応を行なっている。また，津島地区においても，新たな遺跡の確認が進んでいることから，遺跡名称を「津島岡大遺跡」と総称し，届出の有無にかかわらず，少なくとも立会調査を実施している。

1991年度は，発掘調査２件（津島地区，鹿田地区各１件），立会調査43件（津島地区37件，鹿田地区６件）を実施した。そのうち，発掘調査については本章でその概要を述べ，立会調査の詳細については表１（p.15～16）に示す。　（松木）

２　発掘調査

①津島岡大遺跡第８次調査〈A地点：遺伝子実験施設　津島地区BD18・19区，Ｂ地点：合併処理槽　津島地区BH13区〉

Ⅰ．Ａ地点

調査の経過

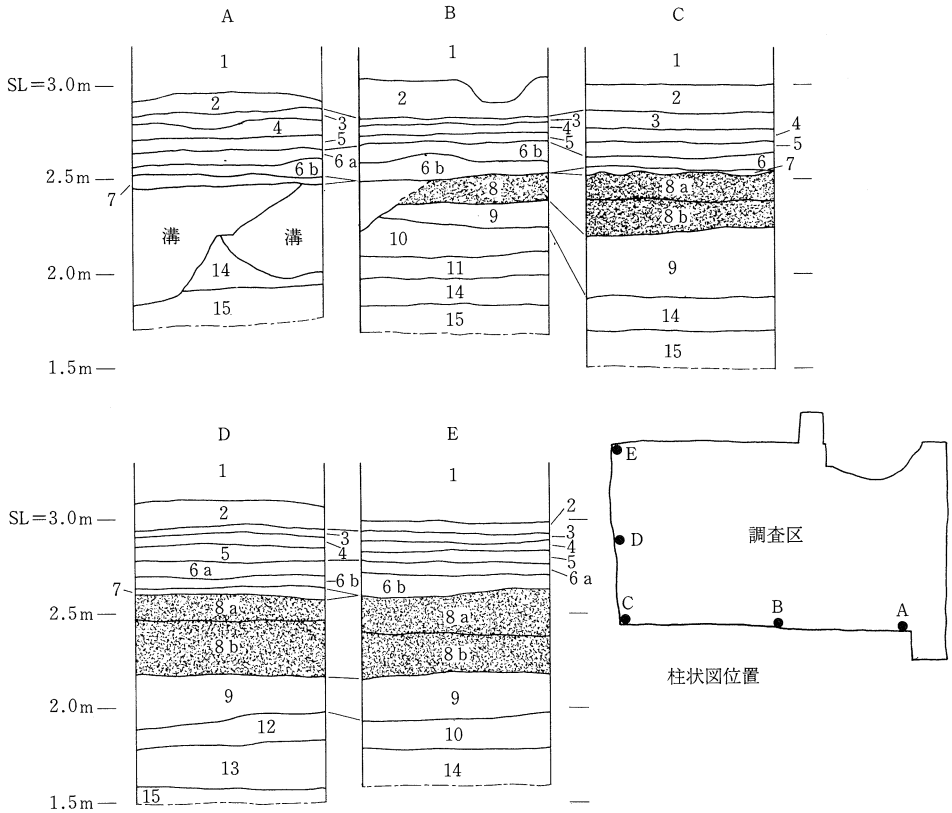
この調査は遺伝子実験施設の新営にともなって行われたものである。調査地点は農学部小動物飼育室の南側にあたり，発掘調査前は空地になっていた。当地点では1988年の試掘調査で，縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色土層に切りこんだ溝を検出し，また，陶磁器，中世土器，弥生土器，縄文土器，石鏃などが出土したため，当地点には遺構，遺物包含層が存在することが確認されていた。また，調査区に隣接して設置してあった防火用水槽を撤去する際の立会調査でも溝と思われる遺構が検出され，弥生土器や石鏃が出土し，上記の試掘調査と同様に遺構，遺物包含層が存在することが確認された。

調査は７月23日から翌年の12月25日まで，調査員２名で行った。調査面積は約650㎡である。

層序と地形（図１）

現地表面は標高3.5ｍ～４ｍである。現表土下の１層は1907年に旧陸軍屯営地建設の際の造成土で，花崗岩のバイラン土である。２層は明治時代の耕作土である。３～５層は，僅少なが

らも出土した遺物から，近世の耕作土と考えられる。6層も良好な遺物は出土していないが，中世の耕作土であると考えられる。場所によってはa層とb層に分層でき，b層の方が若干，きめが細かい。ともに出土した土器から14世紀頃の土層であると考えられる。7層は黒色土の上に薄く堆積した黄灰色細砂質土で，調査区南西部の旧地形が低く落ちていく部分に分布している。8層は黒色土で，7層同様に調査区南西部に分布している。場所によってはa層とb層に分層でき，b層の方が若干砂っぽい。出土した遺物は弥生時代前期の土器を中心とし，縄文時代晩期の突帯文土器をわずかに含んでいる。9層はマンガンを多く含んだ黄褐色土で，僅少ながらも，出土した土器から，縄文時代後期の土層と思われる。10層以下は無遺物層であり，



1　造成土
2　青灰色土（明治）
3　橙灰色土（近世）
4　黄灰色土（近世）
5　黄灰色粘質土（近世）
6a　青灰色土（中世）
6b　青灰色細砂質土（中世）
7　黄灰色細砂質土（中世？）
8a　黒色土（弥生前期～縄文晩期）
8b　黒色弱砂質土（弥生前期～縄文晩期）
9　黄褐色土（縄文後期）
10　明茶灰色土
11　茶灰色細砂質土
12　黄灰色土
13　茶灰色土
14　暗茶灰色細砂質土
15　茶灰砂

図1　土層断面図（縮尺1/40）

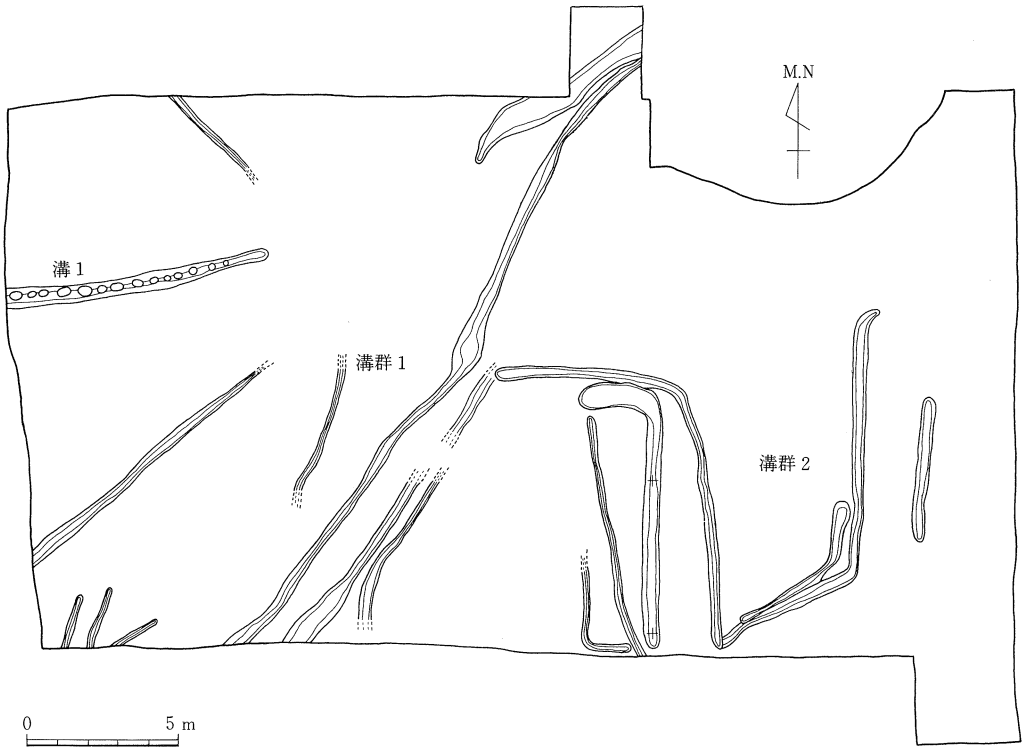


図２　６層下面検出遺構（縮尺1/250）

13層から砂質が強くなっていく。調査区の中央部では，15層の下に砂利からなる沖積層の盛り上がりがみられる。

平面的には，６層までは調査区全面に分布している。６層以下は，調査区北東部を頂部とし，調査区の周縁に向って緩やかに落ち込んでいく微高地となっている。黒色土は，この落ち込んでいく部分に分布している（図３）。また，弥生時代中期～古代の土層は認められなかった。

中世層である６層に６世紀以降の須恵器が混入していることや，６層下面に高さがほぼ一定して平らになっていること，黒色土が微高地の頂部には分布していないことなどから，中世の段階で削平が行われていると考えられる。そして，このために弥生時代中期～古代の土層が失われたと考えられる。

調査の概要

造成土以下２層から６層にかけて検出された遺構は以下のとおりである。２層上面では畝跡，３層上面では，調査区の中央と東隅を南北に横断する幅１ｍ程の溝を２本と畝跡を検出した。４，５層上面では鋤跡，６ａ層上面では，調査区の北西隅にわずかにかかる溝４本を，それぞれ検出している。いずれの層でも図化に耐える遺物は出土しなかった。

６ｂ層を剝いだところで，多くの溝を検出した。可能性のあるものをすべて含めると総数は69本に及ぶが，主な溝を，切りあい，埋土，出土遺物などから，図２・３，写真１・２のように分類した。図２に示したのは古代～古墳時代と考えられる溝である。中世の削平でかなりの部分が失われており，平均的規模は幅17～８㎝，深さ５～６㎝である。埋め土は黄灰色土，ないし青灰色土である。北東～南西方向に走る溝群１と南北，東西方向に走る溝群２に分けることができる。出土した遺物が僅少のため，時期決定が困難だが，６世紀以降の須恵器を含んでいるため，溝群１と溝群２は同時に存在したとは考えにくいが，出土遺物や埋土から考えて，近似した時期に掘られたと思われる。溝群２は図に示したように途中で直角方向に曲がっていることから，方形に区画することを意図しているようである。また，溝１の底からは，ほぼ等間隔に並ぶ浅いピットを検出しているが，今のところその機能・性格は不明である。

図３に示したものは弥生時代の溝，ピット群，縄文時代後期の土壙などである。調査区西側には，南北方向に３㎝程の黒色土の盛り上がりが確認できた。１本しか検出できなかったが，畦畔の可能性が高い。溝２は幅60㎝，深さ45～25㎝程で，弥生時代中期前半の土器を中心に出土している。溝３は幅80㎝，深さ20㎝程で，弥生時代中期初頭の土器を出土している。溝４は

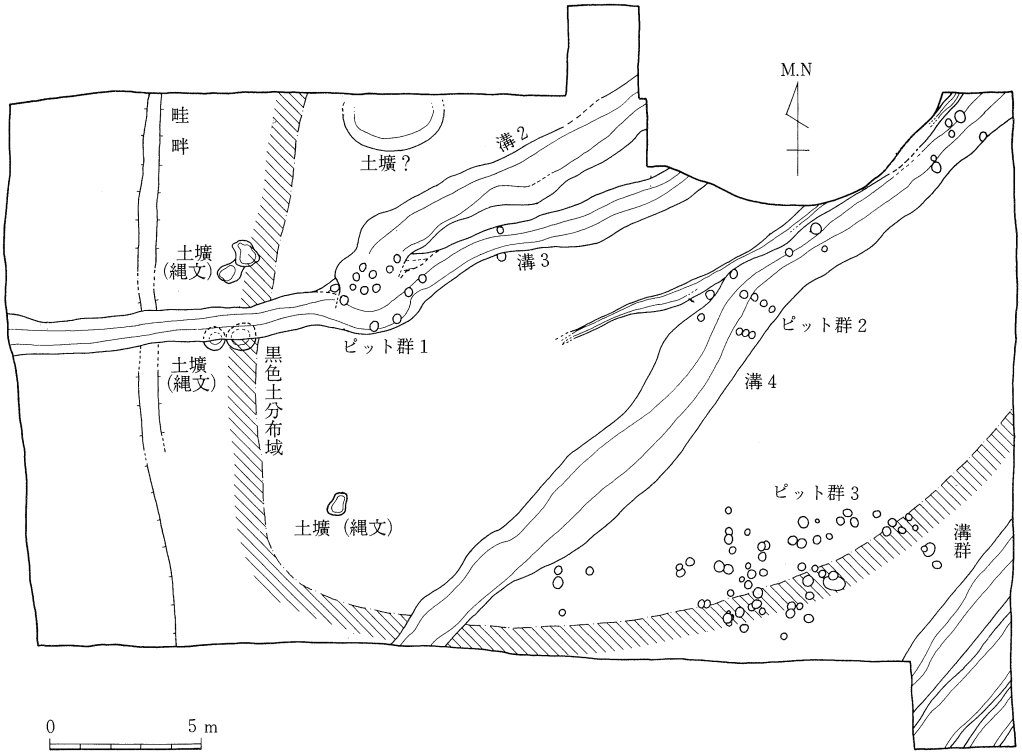


図３　６層下面～９層検出遺構（縮尺1/250）

幅110cm，深さ40cm程で，断面を観察したところでは，数回にわたって掘り直されているようである。遺物は，当調査地点では最も多く出土しており，弥生時代中期，後期前半の土器（図４・１～６）を中心に出土している。調査区南東隅の溝群は幅60～80cm，深さ50cm程で，図示した以外にも数本の溝が並行して切りあっている。この溝群では弥生時代前期～後期の土器を出土している。ピット群１・２はそれぞれ溝３・４の底で検出され，いずれも青灰色砂質土を埋土としている。ピット群３については，遺物が出土していないため，時期が明確でない。検出面は９層上面であるが，平均的な深さが10数cm程度であることから，実際にはさらに上層からの掘りこみであった可能性が高い。埋め土は淡黄灰色土のものがほとんどであるが，一部には黒色土を埋め土とするものも認められ，時期が異なるピットとなる可能性がある。

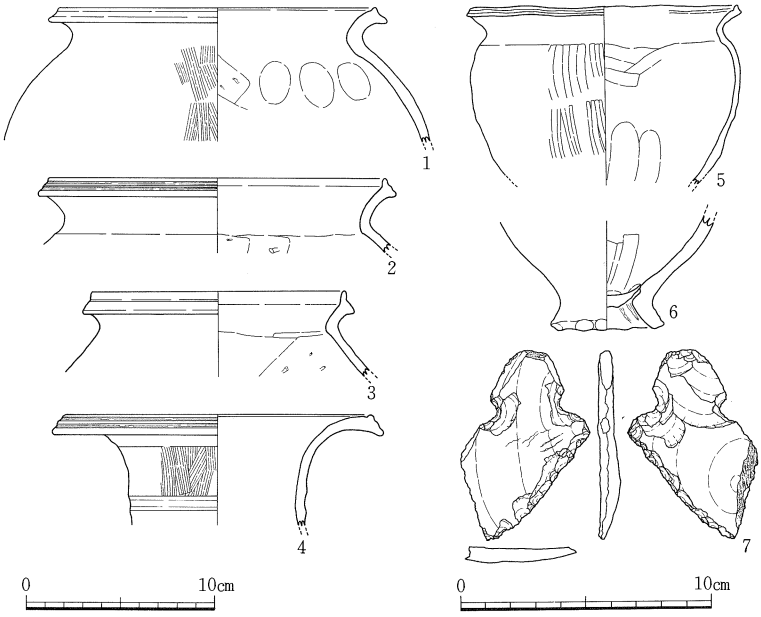


図４　出土遺物（縮尺１～６は1/4，７は1/3，７のみ右スケール対応）

９層上面では土壙を６基検出した（写真３）。土壙の平均的な規模は，直径１ｍ程，深さ50cm程である。焼土，炭化物が多く含まれており，現在，学習院大学に炭化物の年代測定を依頼中である。掘り込み面から縄文時代後期の土壙であると考えられるが，遺物は僅少である。調査区北端の土壙と思われる落ち込みより，安山岩製の縦長の石匙（図４－７）が出土している。

番号	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴ほか	色　調	胎　土
		口径	底径	器高			
1	弥生土器 甕	(16.7)	－	－	内外面口縁部～頸部ナデ，胴部外面ハケメ，内面押圧	橙灰色	細砂多
2	弥生土器 甕	(17.8)	－	－	内外面口縁部～頸部ナデ，胴部外面ハケメ，内面ケズリ	橙灰色	細砂・シャモット含
3	弥生土器 甕	(13.3)	－	－	外面ナデ，内面口縁部～頸部ナデ，胴部ケズリ	橙灰色	細砂含
4	弥生土器 壺	(15.1)	－	－	内外面口縁部～頸部上端ナデ，頸部外面ハケメ	橙灰色	細砂多
5	弥生土器 甕	14.0	－	－	口縁部～頸部ナデ，胴部外面ミガキ，内面ケズリ，押圧	淡橙灰色	微砂・シャモット含
6	弥生土器 鉢	－	5.2	－	外面ナデ，脚端部押圧，脚部内面ナデ，胴部内面ケズリ	橙灰色	微砂多い
7	石匙	7.5	5.1	0.9	自然面打面をもつ安山岩の不定形剝片素材		

番号は実測図の番号に対応する。７は口径，底径，器高をそれぞれ長さ，幅，厚さに読みかえる。

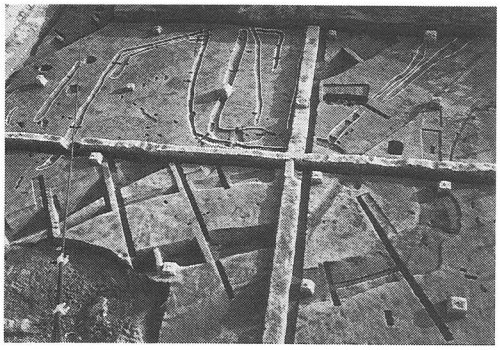


写真１　６層下面検出遺構

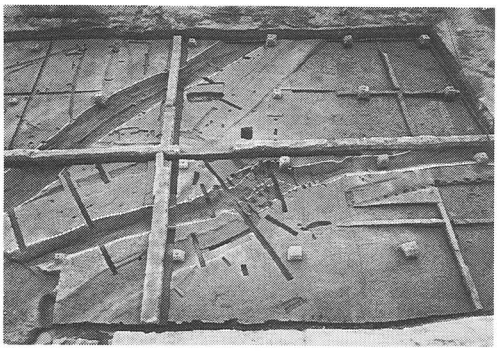


写真２　６層下面～９層上面検出遺構

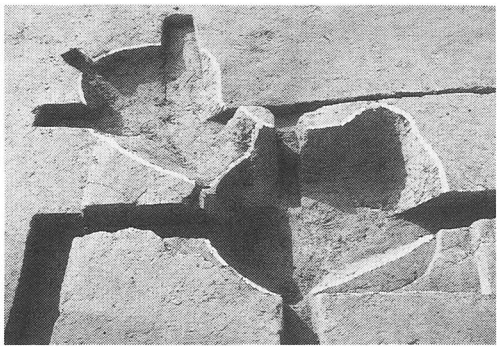


写真３　縄文時代土壙

以上の他に，岡山理科大学に各土層での花粉分析を依頼中である。

まとめ

今回の調査では，調査区が安定した微高地の頂部～斜面部にあたっており，微高地に沿って掘られた弥生時代の溝や，時期は不詳であるが，柱穴と思われるピット群などが検出できた。このように，弥生時代～古代集落に関すると思われる遺構は岡山大学構内では少なく，貴重な資料である。これらは微高地の利用法を知るうえでの資料とすることができる。遺物を概観すると，縄文時代後期以降，ほぼ各時期の遺物が見られるが，弥生時代後期末～古墳時代前期，平安時代後期の遺物はほとんど見られず，集落の断絶があったと考えられる。この時期を埋める資料は，1988年度に行った津島岡大遺跡第６次調査（工学部生物応用工学科棟新営に伴う発掘調査）などで確認されており，集落の移動があったことが考えられる。また，試掘調査では縄文時代の土層は確認されていなかったが，黒色土の下に縄文時代後期の土層が堆積していることが確認された。そして，微高地の縁辺部に土壙が掘られており，土壙の立地を示す資料とすることができる。以上のように，当調査地点では，縄文時代後期から古代にかけては断続的に集落が営まれていたようであり，中世～明治時代は，田畑として利用されていたことが明らかとなった。

（富樫）

注

(1)『岡山大学構内遺跡調査研究年報６』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1989年

Ⅱ　B地点

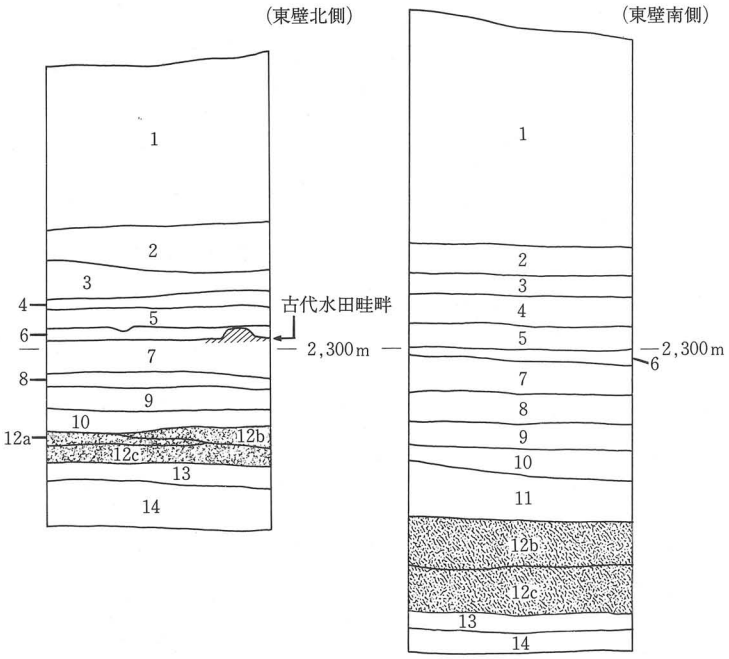
調査の経過

本調査は農学部遺伝子実験施設の合併処理施設の建築にともなう記録保存調査として計画され，1991年8月2日より同年12月18日までの期間で実施した。調査地点の西側隣接地点は農学部合併処理槽が建築されており，この部分の調査は1984年に行われている(図13参照)。

前回の調査では，弥生時代の溝と中，近世の水田層が確認され，遺物は縄文時代晩期から弥生時代前期，中，近世の時期にかけてのものが出土しており，今回の調査でもこうした時期の遺構や遺物の発見が予測されたため，調査区内に２ｍグリッドを組み，水田層以外の層については，基本的に遺物は原位置を記録しながら層位毎に取り上げをおこなった。調査面積は140㎡である。

層序と地形（図８）

調査地点の現地表は標高約４ｍを測る。１層は造成土であり，本層は重機により掘削し，２層以下を手掘りで層位的に掘り下げ，調査最深部の標高0.8ｍまでのあいだに，大別15枚の土層の堆積を識別した。２層は近世，３，４層は中世の遺物を少量含んでおり，それぞれに数枚の水田土壌を確認した。５～７層は古代の遺物を少量含み，砂質に富む土層と粘質土の互層となっており，７層上面で東西にはしる２本の畦畔を検出した。９層からは，わずかであるが弥生時代中期前半の土器片が出土している（図８-8,9)。



1　造成土
2　青灰色微砂粘土
3　黄褐色微砂粘土
4　青灰色粘土
5　暗青灰色微砂土
6　灰白色微砂土
7　青灰色砂質土
8　青灰色砂質土（7＞8）
9　暗茶灰色砂質土
10　暗青灰色砂質土
11　暗青灰色粘質土
12a 黒褐色土
12b 暗褐色土
12c 黒褐色土（14>13）
13　暗褐色土(無遺物層，斜面下方で青灰色粘土層に移行)
14　暗褐色土（無遺物層）
※全体の統一をはかるため，B地点の共通層のみを図示し，亜層等は省略してある。＞＜は土層の色調の明るさを示す。

図５　土層断面図

9層は東西にはしる弥生時代の溝の検出面であり，全体に南に向かって緩やかな傾斜をもつ。10～12層は弥生前期の遺物の主包含層であり，とくに10，12層に集中して，ある程度の面的な広がりをもっている。12層とした土層は津島地区の微高地上に特徴的に認められる土層であり，本調査区では北側では比較的堆積が安定しているが，南の傾斜面下方ではそれらが漸移的に粘土化して黒色粘土層に移行していくことが確認された。

検出された遺構と遺物（図7，8）

今回の調査で検出された遺構は，古代の水田畦畔と土坑2基，弥生時代の溝7条であった。畦畔は東西方向にはしるもので，この地区の畦畔の方向と同一であった。弥生時代の溝は調査区の北西隅に二本が，中央付近に5本が重複して検出された。溝内の土層の堆積から，いずれも流路は東から西方向であることがわかっている。これらは西側隣接地点の調査で検出されたものと同一の溝と考えれる。

また一部の溝の底部付近に，足跡状の凹凸が集中的に認められた部分がある。砂層と粘質土の薄層が互層を成す部分で一部の互層を踏み込む状況がセクションで確認できた。

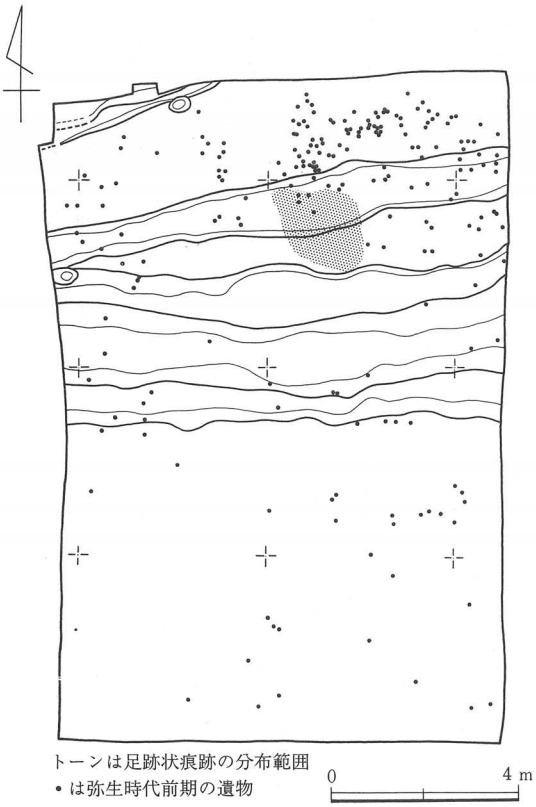


図6　弥生時代の遺構と12a，b層における遺物分布状態

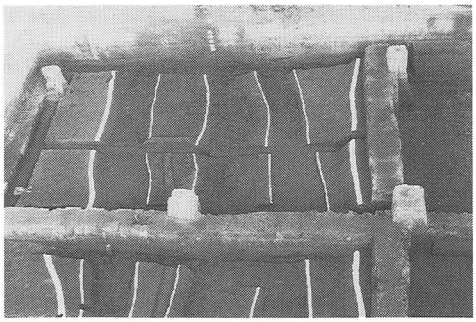


写真4　9・10層検出の弥生時代の溝(3～7)
7本の溝が複雑に重複しており，いずれも流路を東→西にとる。砂質に富む土層が堆積し，弥生前・中期の遺物が出土している。

写真5　溝7下底面における足跡状痕跡の検出状態
溝の下底面は，黒色の粘質土層と砂層の互層で，踏み込み面の下底面に足跡状の痕跡が検出された。

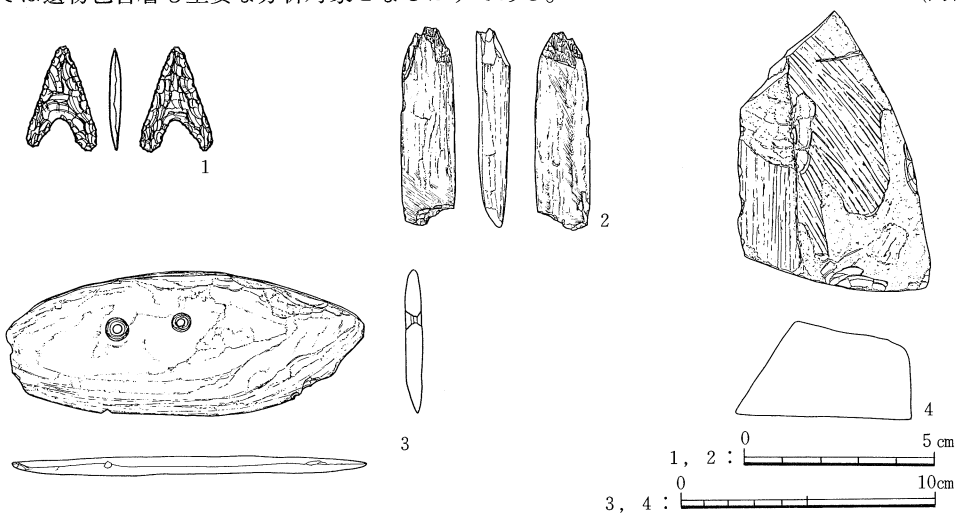
これらは多くが複雑に重複しており，確認状況ではマーブル状の土層の乱れとして検出された。平面形状やセクション等のデータとともに他の「足跡」状の痕跡との比較検討が必要であろう。その際に掘り上りが単に足跡に似ているというだけでは根拠に欠けることは言うまでもない。この他に14層上面で多くの小穴を検出したが，形状，土層の堆積状態から，いずれも植物等の生痕と判断された。

出土遺物の主要なものを図７・８に示した。図７は弥生時代前期の石器である。器種は比較的豊富であるが，出土量は少ない。図８の１～７は12層出土の弥生時代前期の土器である。８，９は９層出土の中期前半の土器で８は平行沈線が施され，以下に波状文が描かれる。９は口縁が強く外反する壺である。

まとめ

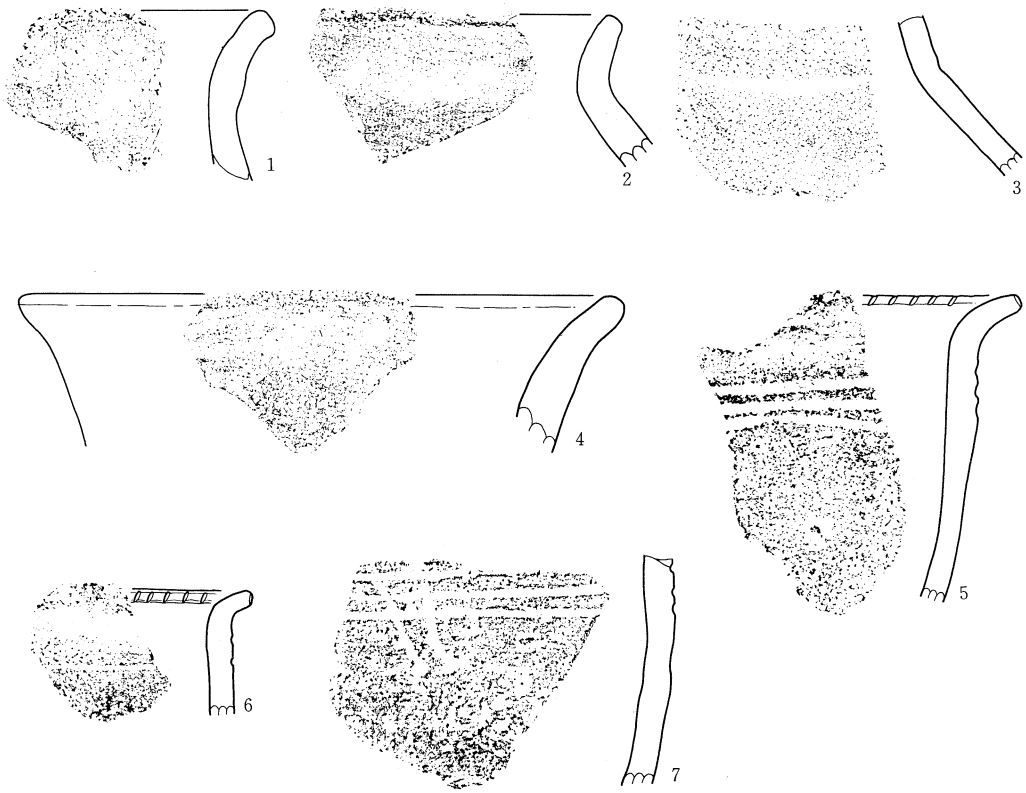
今回の調査では，古代～近世の土層の多くに水田土壌が確認できた。水田経営は南に緩やかな傾斜をもつ弥生時代以来の地形が砂質に富む土層の堆積により，ほぼ平坦となった地形返遷と連動したものと考えられる。また弥生時代前期，中期には東西にはしる溝が複数確認できたが，とくに黒色土上面における遺物の廃棄ブロックの在り方などから，調査区北側にさらに濃密な遺構，遺物群から成り立つ生産居住域の展開が予測できる。今後は遺構の性格や分布状態とともに，遺物群の多角的な分析による当該期の生活址の復元が課題となろう。そうした意味では遺物包含層も重要な分析対象となるはずである。

（阿部）

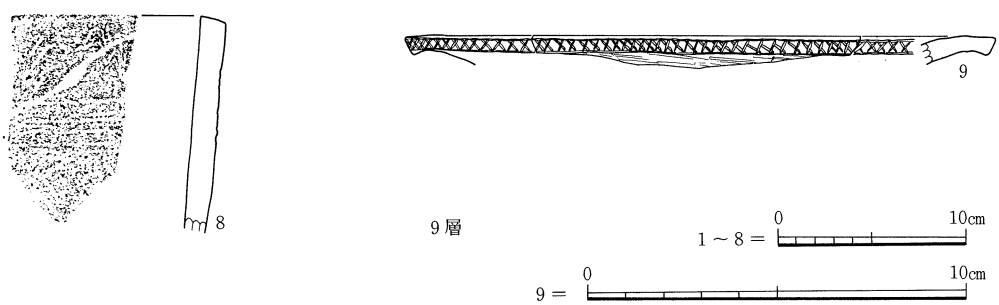


図版No	器種	現存長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	出土層位
図７　1	石鏃	27.5	19.1	3.1	1.1	サヌカイト	12b層
〃　2	磨製石斧	78.9	21.4	11.0	30.2	結晶片岩	12b層
〃　3	石庖丁	56.8	141.2	7.4	90.2	〃	12b層
〃　4	砥石	11.5	68.9	42.8	431.4	砂岩	12a層

図７　12a，b層出土遺物(1)



12a，b層



図版No	器　種	部位	調　　整	色　　調	胎　　土	出土層位
図8　1	壺	口縁	内ヨコナデ，外ヨコナデ	赤褐色	石英・長石多含	12a層
〃　2	鉢	〃	内ヨコナデ，外ヨコナデ	〃	〃	12b層
〃　3	壺	肩部	磨滅	灰色色	〃	12a層
〃　4	〃	頸部	内ナデ，外ミガキ	黒褐色	〃	〃
〃　5	鉢	口縁	磨滅	赤褐色	〃	〃
〃　6	〃	〃	〃	灰褐色	〃	〃
〃　7	〃	胴部	内ミガキ，外ナデ	暗灰褐色	〃	〃
〃　8	壺	口縁	内ハケメ，外ナデ	灰褐色	石英・長石細粒多含	9層
〃　9	〃	〃	磨滅	黒～灰褐色	〃	〃

図8　9，12a，b層出土の遺物(2)

②鹿田遺跡第６次調査＜アイソトープ総合センター＞（鹿田地区BW～CC・67～71区）

調査の経過

アイソトープ総合センターの新営に先立ち，医学部構内の建設予定地（図13）において1990年11月20日から1991年６月30日まで，発掘調査を実施した。そのうち1991年３月までの調査成果は，すでに本センター年報第８号でその概要を記したので，以下では1991年４月以降の成果を中心に述べることとする。基本層序と地形についても年報第８号に既述しているので参照されたい。なお，調査面積は約690㎡で，３名の調査員が担当した。

調査の概要

中世層上面では，前年度までに溝６，井戸１，土壙１，掘立柱建物３，柵列１などの遺構を確認していたが，本年度はこれに加えて溝20，土壙１，掘立柱建物３のほか，多数のピット群を検出した。溝はほとんどが浅く，東西・南北方向に密集して走るが（写真６），同時存在は考えがたく，いくつかの段階が想定されよう。ただし，これらの溝は，出土遺物にさほどの時期幅が認められないことから，短期間のうちに頻繁に掘りかえられたものと推測できる。溝の用途・機能の問題とあいまって，その解釈は今後の課題である。前年度に検出したものも含めて，切合関係から中世遺構群の趨勢を検討した結果，まず縦横の浅い溝が，続いて調査区西半部を中心に南北方向の深い溝がつぎつぎと掘り直され，そののちに建物や井戸が作られていることがほぼ明らかになった。

古墳時代前期の遺構面（７層）では，溝７本を検出した（図９）。方向が不規則で弧状に走る場合があるなどの点で中世の溝群と様相が異なる。遺物は大部分が土器であり，器種は甕・壷を中心に高杯が加わる。これらが溝内数箇所からおのおの完形またはそれに近い状態で出土したことは，溝の性格を明らかにするうえでも注目されよう（写真７）。さらに下の８層では，弥生時代末から古墳時代初頭の土器と，加工痕のある木材片の入った土壙（巻頭写真下）および溝２本を確認した。

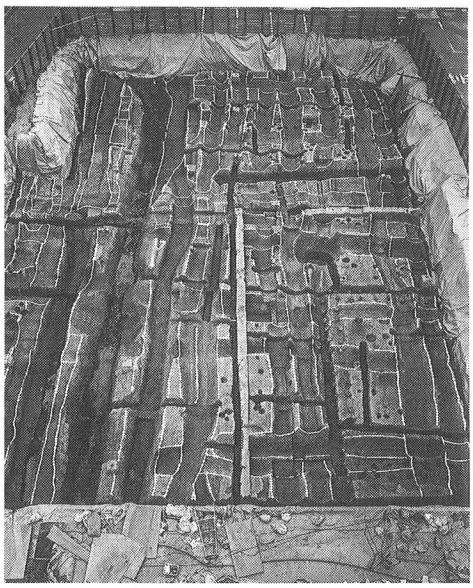


写真６　中世の溝群

まとめ

鹿田遺跡における集落の実態は，医学部付属病院外来診療棟用地[1]（1983・84），同管理棟用地[2]（1987・88），医療技術短期大学部用地[3]（1986・87）などの各調査によってしだいに明らかになりつつある。今回の調査地は，これまで本格的な調査の手が及

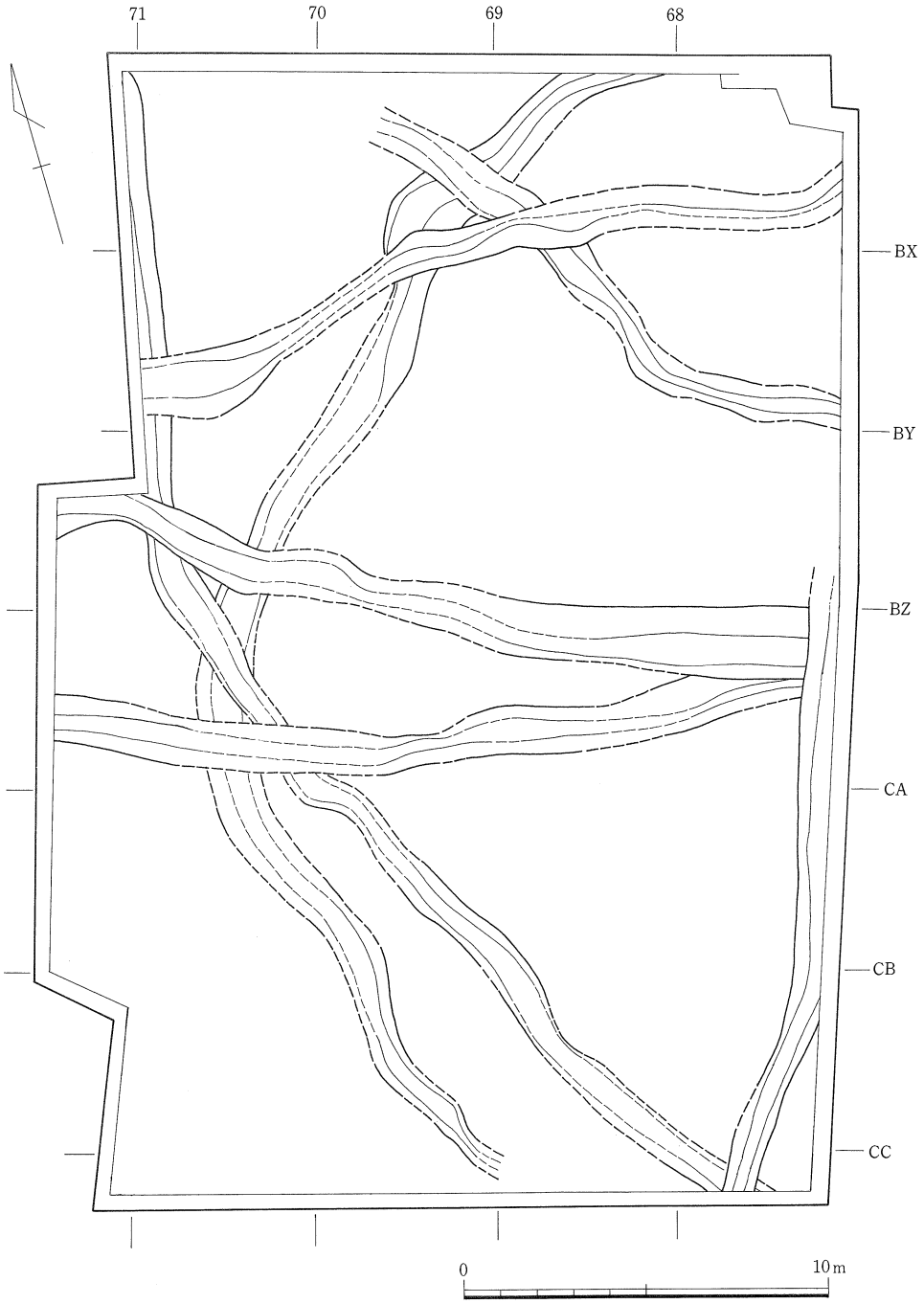


図9　7層上面遺構（縮尺1/200）

んでいない敷地の西端部に当たることから，鹿田遺跡の変遷と構造を解明するための新しい材料を得られる期待がもたれていた。そういう意味で，これまでの調査地点において比較的少なかった13世紀代の遺構・遺物が多数確認されたこと，及び東西南北に走る溝群が検出されたことの意義は大きい。ただし，とくに溝群の解釈については，集落構造の考察とあいまって，今後さらに綿密な検討が必要であろう。

写真７　土器出土状況

弥生時代末から古墳時代前期の遺構・遺物の密度はかならずしも高くなかった。これまでの調査成果から判断すると，この時期の集落の中心は北東の付属病院付近に推定でき，本調査地点は集落の西の縁辺部付近に当たるものとみられる。このことは，溝の状況や，やや特異な土器の出土状態を解釈するうえで注意すべき点である。

以上のように，今回の調査では，これまで不明な点の多かった鹿田集落の縁辺部の状況について新たな知見が得られると同時に，土器を中心とした遺物についても貴重な研究資料が提供され，成果を挙げることができた。（松木）

注

(1)『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第３冊　1988　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(2)『岡山大学構内遺跡調査研究年報』５　第２章－２　1988　岡山大学埋蔵文化財研究センター

(3)『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第４冊　1990　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

４　立会調査

(1)　津島地区（表１，図11・12　12，13）

1991年度の津島地区では，事業別にみると27件，詳細にみると37件の立会調査を行った。ほとんどは造成土内あるいは撹乱内で終了した。掘削深度が大きい場合も，きわめて小規模で遺跡への影響がほとんどないものが大半であった。したがって，特筆すべき調査は，以下に挙げる４件のみである。

調査９と27は，津島岡大８次調査に関連する立会である。調査９は，工事予定地内の防火用水の撤去にともない立会を行ったが，壁面観察により，弥生時代以降と推定される遺構群が確認された。その際，壁面清掃中に出土したのが図10に掲げる石鏃である。その他にも土器小片が数点出土した。本調査によって，この遺構群は，弥生時代中期～古墳時代初頭の溝群であることが確認された[(1)]。一方，調査27は，本調査終了後に，地下室工事に伴って立会を行った。本調査終了面で一部がのぞいていた砂礫層が，地表下５ｍ以上に至るまで堆積しているのが認められた。おそらく沖積基底礫層と考えられるが，この地点から南西に約150ｍ離れた，農場管理棟合併処理槽の立会調査でも，地表下２ｍ足らずで砂礫層が確認されており[(2)]，北東から南西方向へ沖積基底礫層が自然堤防状の高まりを形成していたようである。

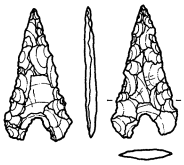


図10　調査９出土遺物
（縮尺2/3）

調査６と17では，かなり深く掘削したものの，遺構・遺物は確認されなかった。調査６は，近接地が1988年に試掘調査され[(3)]，湿地状の地形が広がっていることがわかっており，今回もそれを追認する結果となった。調査17は，津島岡大遺跡の西限をおさえる資料になる可能性がある。

今年度は，津島地区の西南部における，遺跡の立地や広がりをおさえられる資料を加えることができた。データの希薄な部分だっただけに，既存の調査と合わせ，津島地区全体の遺跡立地・地形復元がかなり進むことが期待できる。しかし一方で，毎年のように指摘されていることだが，連絡不徹底による悶着が少なからずあった。今後いっそう連絡の徹底を図っていかなければならない。（土井）

(2)　**鹿田地区**（表１，図14）

鹿田地区では，今年度の立会は６件であった。そのうち，調査35においては地表下1,0ｍで近世層，1.3ｍで中世層に，調査21・34では地表下0.8～1.0ｍで近世層に達したが，遺構や遺物は発見されなかった。（松木）

注

(1)　本年報第２章２参照

(2)　『岡山大学構内遺跡調査研究年報』５　1988　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(3)　『岡山大学構内遺跡調査研究年報』６　1989　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

表1　1991年度調査一覧

番号	種類	調査地区	所属	調査名称		調査期間	掘削深度(m)	備考
1	発掘	鹿　田 BW～CC67～71	RI	アイソトープ総合センター(RI)		4,1～6,30	1.5～2.7	調査面積690㎡ 鎌倉時代溝・建物群，土器他 弥生～古墳時代溝・土壙，土器 **＜鹿田6次調査＞**
2	発掘	津島北 BD18・19	農	遺伝子実験施設		7,23～12,25	1.3～1.8	調査面積650㎡ 弥生時代～近世溝等，縄文時代土壙，土器・石器他 **＜津島岡大8次調査・A地点＞**
		津島北 BH13	〃	(合併処理槽)		7,23～12,2	2.5～3.2	調査面積140㎡ 古代～近世水田，弥生時代溝土器・石器他 **＜津島岡大8次調査・B地点＞**
3	立会	津島南BC～BE09	教養	樹木移植		3,30～4,1	0.3～0.5	造成土内
4	〃	津島南BG・BH13	農	テニスコート排水暗渠取設		4,1	0.45	造成土内
5	〃	津島北AV04	工	自転車置場新設		4,4	0.1	造成土内
6	〃	津島南BC26	事	外国人留学生会館グリストラップ埋設		4,6	2.0	～GL-1.4m攪乱土遺跡未確認
7	〃	津島北BC18	図	樹木移植		4,15	0.7	造成土内
8	〃	津島南BF02～03	学	旧男子学生寮解体		5,7	0.5～0.6	造成土内
9	〃	津島南BC18	遺	防火用水撤去		6,1	2.0	～基盤層，8次調査隣接地
10	〃	津島北AU09・10	工	雨水排水管補修		7,23～7,30	0.8～1.2	造成土内，緊急
11	〃	津島南BB04	教養	水道管破裂		8,21	1.1	造成土内，緊急
12	〃	津島南BF14	農	本館模様替え給排水配管		9,4	0.2～0.5	造成土内
13	〃	津島北AV13	図	ボイラー室横水道管破裂		9,6	0.7	造成土内，緊急
14	〃	津島南BC18	事	津島地区基幹整備（電気）関連	配管	11,5～7	0.7	GL-0.5mで明治層上面
15	〃	津島全域			配管	11,5～12,14	0.7	造成土内
16	〃	津島南BC10, 津島南BF04～07 津島北AZ13～14 津島北AW04・05			ハンドホール	11,14 11,17～29 12,2 12,10	1.1～1.3	～近世層上面
17	〃	津島南BB16			ハンドホール，アース板	11,12～13	1.7～1.8	遺跡未確認
18	〃	津島南AZ15			アース板埋設	12,2	1.7	攪乱内
19	〃	津島北BD15			アース板埋設	1,14	1.7	黒色土上面
20	〃	津島北BA12・13			電柱	1,20	0.9	造成土内，連絡不備
21	〃	鹿　田CT44	医	水道管破裂		11,7	0.9	～近世層上面
22	〃	鹿　田BY・BZ15・16	医病	附属病院受水槽設置		12,2	0.15	造成土内
23	〃	津島北AZ07	RI	有機廃液貯蔵施設新営		1,17　1,22	0.5	造成土内，連絡不備
24	〃	津島南BC18	遺	遺伝子実験施設新営関連	工事用スロープ	1,23	1.1	造成土内

番号	種類	調査地区	所属	調査名称		調査期間	掘削深度(m)	備考
25	立会	津島南BA18,BC18	遺	遺伝子実験施設新営関連	電柱	1,27	0.6～0.9	～明治層
26	〃	津島南BC18			作業用拡張部	2,12	0.8	～明治層
27	〃	津島南BC18			地下室	2,21　2,25	4.0～5.0	調査終了面以下,基盤無遺物層
28	〃	津島南BE・BF04～07 CK58～62	教養	陸上競技場散水管配管		1,28～2,24	0.4～0.5	造成土内
29	〃	鹿　田CB67～80	RI	樹木移植		2,7	0.5	造成土内
30	〃	津島南BE・BF04～07	教養	陸上競技場改修関連	側溝	2,10	0.5	造成土内
31	〃				ラグビーポール付替	2,10	1.5	攪乱内
32	〃	津島北AY08・09	理	樹木移植		2,12	0.6～0.7	造成土
33	〃	鹿　田BV～BY45～47	医	医学部基幹整備関連	樹木移植	2,26	0.5	造成土内
34	〃	鹿　田BW～BZ45～49			駐車場建設	2,28	0.3～1.0	～近世層上面
35	〃	鹿　田BK～BX43～54			水銀灯設置	3,17～3,19	1.0～1.5	GL-1mで近世層上面, -1.3mで中世層
36	〃	津島北AU11	埋文	木器処理施設新営		3,3～4	0.5	造成土内
37	〃	津島南BE・BF22	農場	有機物処理整備		3,9	1.1～1.4	造成土内
38	〃	津島南BF14	農	電力外線配管		3,9～14	0.8	造成土
39	〃	津島北AY・AZ14 AZ13・AX・AY16	文法経	構内街灯設置		3,10～11	1.0～1.1	造成土内
40	〃	津島南BC・BE・BF12	事	南北道路街灯設置		3,14	1.5	GL-1.4mで古代層確認
41	〃	半田山AI03		高圧鉄塔周辺排水側溝敷設		3,17	0.4～0.7	GL-0.1mで地山
42	〃	津島南BF14	農	学部案内板設置		3,19	0.6	造成土内
43	〃	半田山AO09　AO12・13	農	自然教育研究林内排水整備		3,23～31	0.4～0.8	GL-0.1～0.2mで地山
44	〃	津島北AY11	理	樹木移植		3,24	0.4～0.5	造成土内
45	〃	津島北AW05	工	樹木移植		3,25	0.4～0.6	造成土内

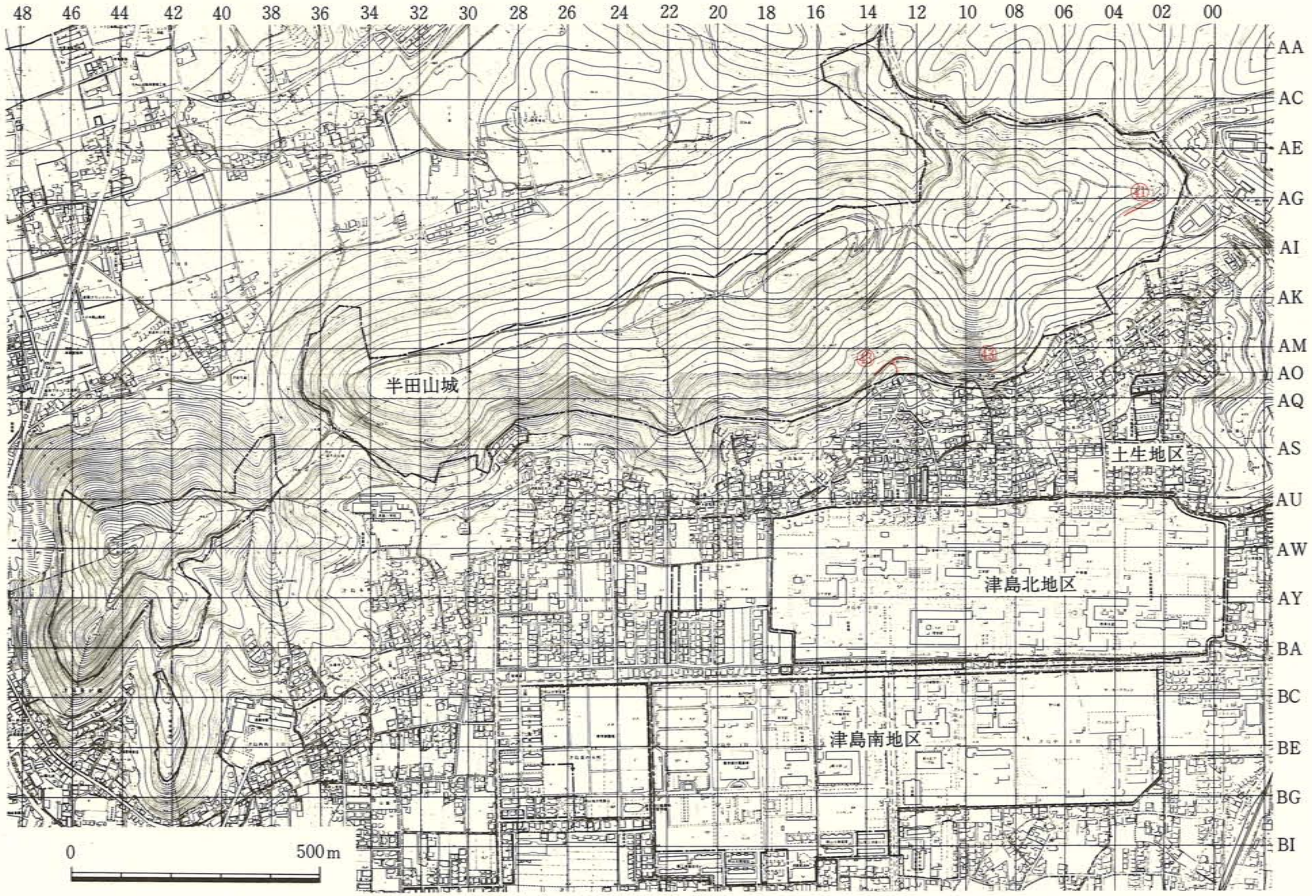


図11　津島地区全体図　（縮尺1/15000）

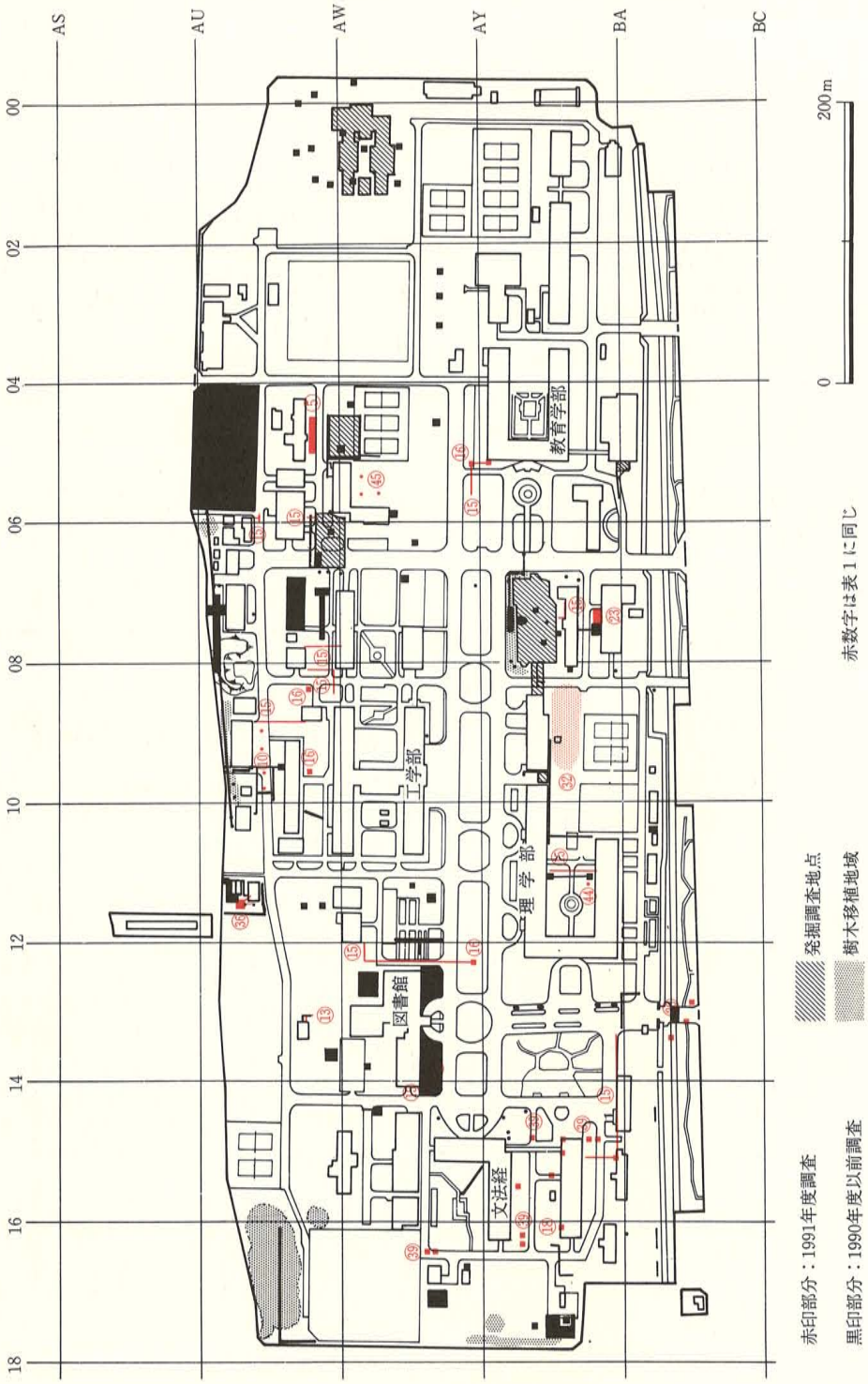
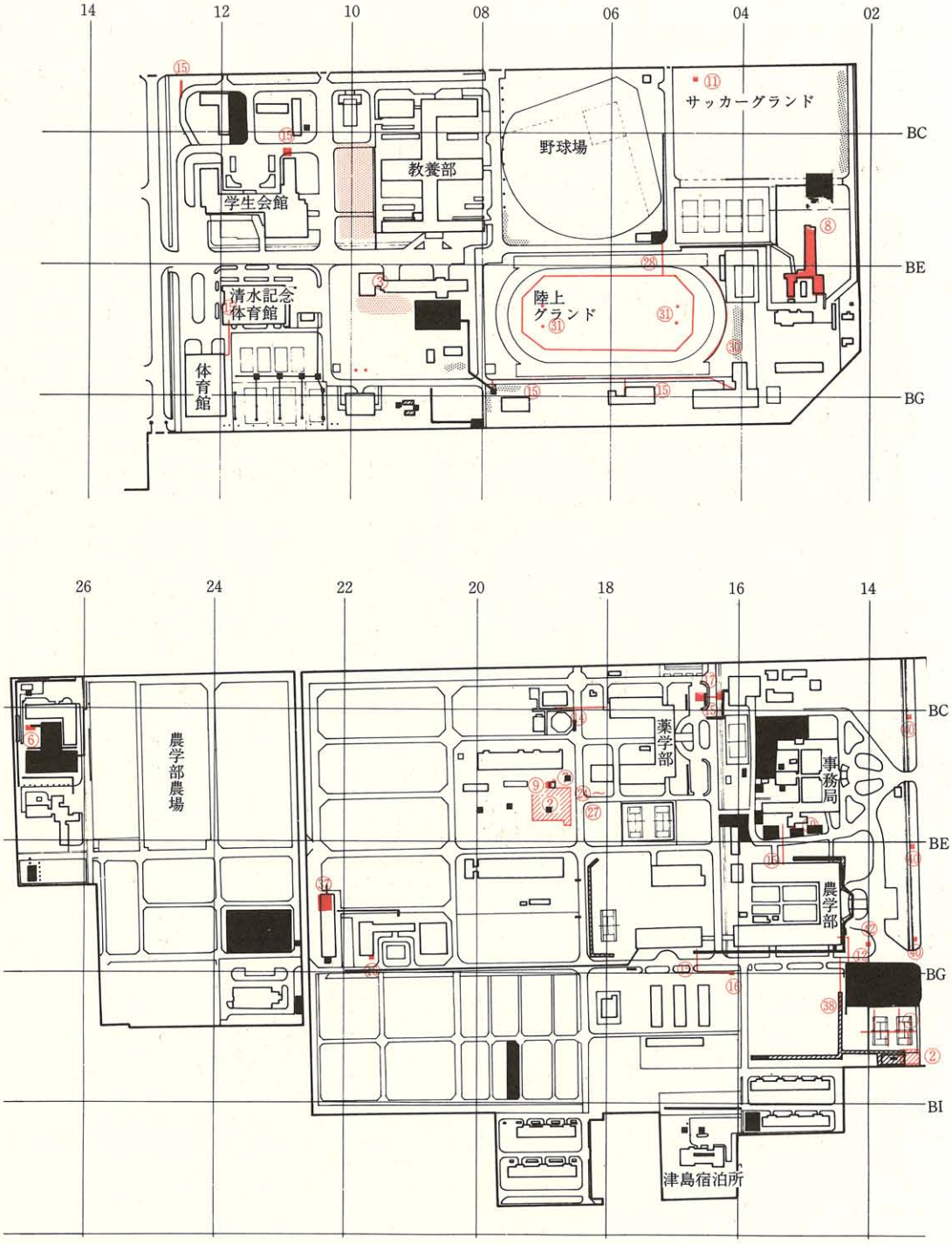


図12　津島北地区（縮尺1/5000）



赤印部分：1991年度調査

黒印部分：1990年度以前調査

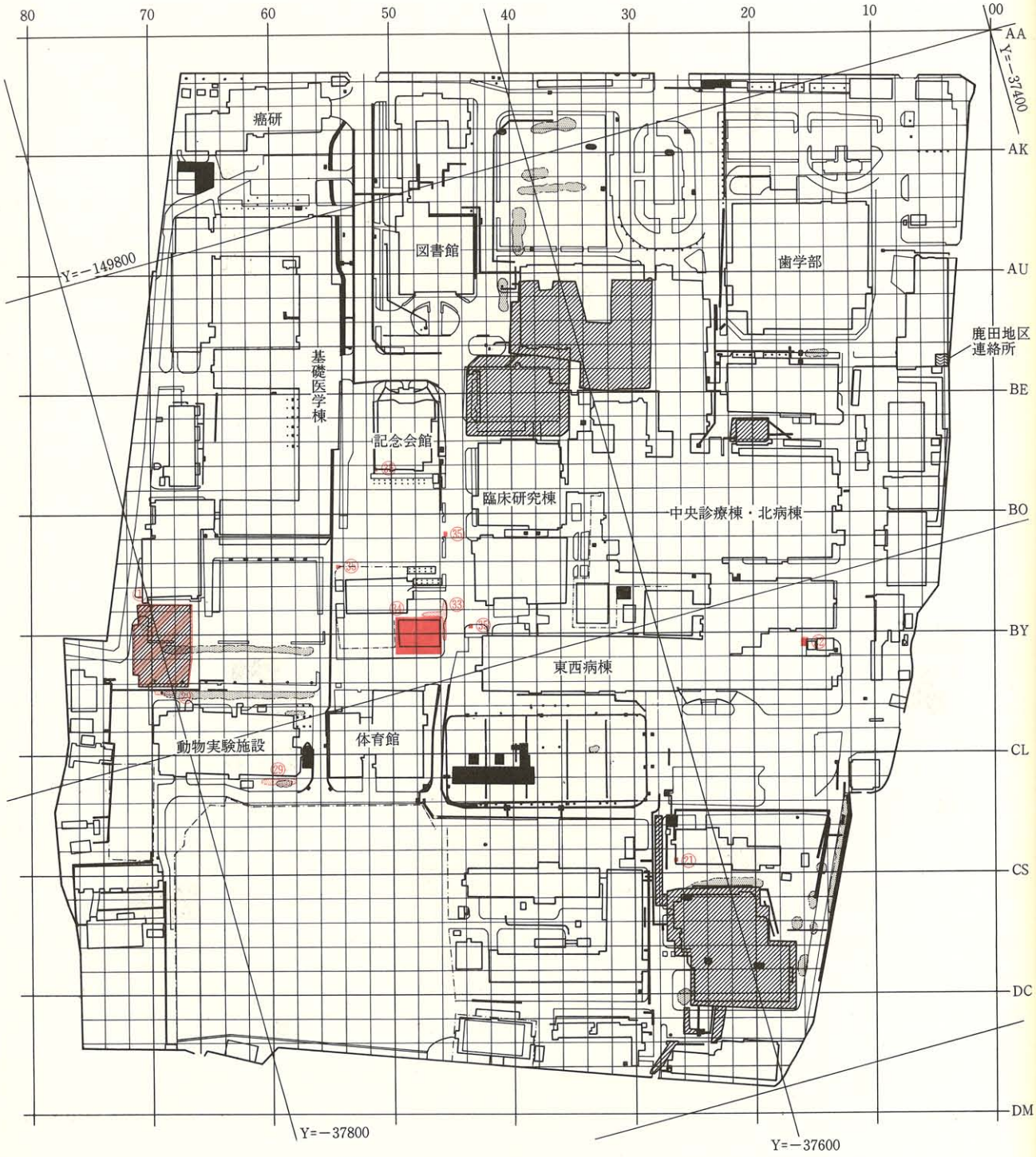
発掘調査地点

樹木移植地域

赤数字は表１に同じ

0　200 m

図13　津島南地区（縮尺1/5000）



赤色部分：1991年度調査　　発掘調査地点　　赤数字は表１に同じ

黒色部分：1990年度以前調査　　樹木移植地域　　0　100m

図14　鹿田地区全体図（縮尺1/2500）

第２章　1991年度普及研究・資料整理活動

1　資料整理

本年度は次の６件の発掘調査の資料整理を行った。

①　津島岡大１次調査（学生部男子学生寮予定地）

報告書刊行

②　鹿田５次調査（医学部附属病院管理棟）

出土遺物の復元・実測・一部写真撮影，出土種子類の採集，遺構のトレース

③　津島岡大５次調査（大学院自然科学研究科棟）

出土遺物分類，復元，出土種子類の洗浄・採集

④　津島岡大６次調査（工学部生物応用工学科棟）

出土遺物の復元・実測，出土種子類の採集

⑤　津島岡大７次調査（工学部情報工学科棟）

遺構のトレース

2　分析依頼

①　出土種子同定…大阪市立大学理学部教授　粉川昭平

津島岡大遺跡（３次調査）：縄文時代晩期貯蔵穴内出土種子・縄文時代後期層出土種子
古代河道内出土種子

②　灰像分析・炭化物の同定…東京大学総合研究資料館　松谷暁子

津島岡大遺跡（３・５次調査）：縄文時代後期貯蔵穴内出土土器内炭化物

③　木製品樹種同定…農林水産省森林総合研究所　能城修一

鹿田遺跡（１・２・５次調査）：弥生時代中期～中世の井戸・溝等出土木製品他

津島岡大遺跡（４・６次調査）：古代溝出土杭群・縄文時代後期河道出土自然木他

〃　　（５次調査）：縄文時代後期貯蔵穴出土竪櫛

3　刊行物

①　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第６号	1991年８月	発行
②　岡山大学構内遺跡調査研究年報　第８号	1991年12月	発行
③　岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第５冊	1991年３月	発行
④　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第７号	1991年３月	発行

※なお，1990年度までの刊行物については附表３・４で一覧にして挙げている。

4　調査員の活動

(1)　資料収集活動

阿部芳郎

中部地方における縄文早期土器の実査：長野県御代田町教育委員会，岡谷市教育委員会

関東地方における縄文早期土器の実査：神奈川県埋蔵文化財センター，横須賀市立博物館，明治大学考古学研究室

東日本における縄文時代竪穴住居資料集成：明治大学考古学研究室，山梨県富士吉田市教育委員会

土井基司

丹波・但馬・若狭の横穴式石室の実査：若狭歴史民俗資料館ほか

種子鑑定資料返却ほか：大阪市自然史博物館

平安時代の土器資料収集：防府市教育委員会

中世土器の資料収集：広島県立博物館，鴨方町歴史民俗資料館，府中市文化センター

富樫孝志

南関東における尖頭器文化成立過程の研究：神奈川県大和市教育委員会，岡山県立埋蔵文化財センター

石灰岩地帯における遺跡及び第四紀哺乳類化石産出地点の調査：岡山県阿哲台

松木武彦

中世都市遺跡の遺物について：広島県立博物館

山本悦世

縄文土器について：島根県匹見町教育委員会

中世土器について：広島県立博物館，山口県防府市教育委員会

(2)　学会・研究会等参加

阿部芳郎

考古学研究会総会（４月），日本考古学協会大会（５月）

土井基司

考古学研究会総会（４月），埋蔵文化財研究会（８月，２月），古代学協会四国支部大会（９月），九州史学会（12月），中近世土器研究会（12月），東アジア考古学・古代史研究交流会（２月）

富樫孝志

考古学研究会総会（４月），中四国旧石器文化談話会（10月），山口県旧石器文化談話会，

松木武彦

考古学研究会総会（４月），日本考古学協会大会（５月），埋蔵文化財研究会（２月）

山本悦世

考古学研究会総会（４月），中四国縄文研究会、中世土器研究会（12月）

(3) 研究発表他

富樫孝志

「相模野台地における尖頭器製作」考古学研究会例会

山本悦世

「吉備系土師器椀の成立と展開」中世土器研究会

(4) 論文・資料報告他

阿部芳郎

「狩猟具としての石器～縄文時代における石鏃の集団保有と狩猟活動～」（『季刊考古学』35号）

「堀込遺跡における早期前葉土器群の構成」（『栃木県市貝町発掘調査研究報告書』市貝町教育委員会）

「堀込遺跡における早期前葉石器群の構成」（同上）

富樫孝志

「山口県における石器原材の原産地推定」（『第四紀研究』30巻４号＜共著＞）

松木武彦

「銅鏃の終焉」（福永伸哉編『長法寺南原古墳の研究』）

5　日誌抄

4月1日　稲田センター長着任　富樫孝志助手着任
年度始め打ち合わせ
4月11日　今年度活動内容等打ち合わせ
4月17日　センター報第5号発送
4月18日　月例会議
5月9日　運営委員会
1990年度決算，1991年度予算，人事，事業計画等
5月15日　月例会議
5月16日　管理委員会
1990年度決算，1991年度予算，人事，事業計画等
5月30日　種子類および木質遺物サンプル同定のため，松谷暁子・能城修一両氏に資料を発送
6月3日　土井・富樫・山本3名，縄文土器資料実査のため京都大学へ（研修）
6月19日　遺伝子実験施設用地（津島岡大8次）発掘調査打ち合わせ
6月22日　アイソトープ総合センター用地（鹿田6次）発掘調査，現地説明会
6月29日　同　調査終了
7月1日　阿部芳郎助手着任
7月4日　遺伝子実験施設用地発掘調査打ち合わせ
7月15日　同　調査開始（～12月28日）
木器処理施設打ち合わせ
7月22日　月例会議
7月29日　松木，木器処理施設見学のため岡山県古代吉備文化財センターへ
8月6日　元興寺文化財研究所にて保存処理中のアンペラが作業完了，到着
9月13日　管理委員会（持ち回り）
人事について
9月26日　木器処理施設打ち合わせ
10月1日　内田恵（技術補佐員）着任
10月2日　木器処理施設打ち合わせ
10月17日　月例会議
年報8進捗状況
ワックス掛けの段取り
11月13日　年報8入稿
11月19日　木器処理施設打ち合わせ
11月25日　センター建物内ワックス掛け
11月28日　土井・松木・山本・内田4名，中世遺跡出土資料実査のため，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所へ（研修）
月例会議
木器処理
センター報第7号企画
12月10日　運営委員会
木器処理外注分搬出準備開始
12月17日　年報8，センター報第6号発送
12月25日　月例会議
センター報第7号進捗状況
木器処理外注分搬出の段取り
今年度残り予算，購入図書
12月27日　遺伝子実験施設用地発掘調査終了
大掃除，御用納め

1992年
1月4日　仕事始め
1月9日　木器処理施設打ち合わせ
1月10日　半田山演習林内踏査
1月17日　外注分木器，元興寺文化財研究所へ搬出
2月3日　未処理木器貯蔵水槽水替え
2月12日　入口看板設置の打ち合わせ
2月21日　月例会議
工学部情報工学棟・生物応用工学棟（津島岡大6・7次）調査他，整理および報告書進捗状況
1992年度予算案，活動計画案
3月24日　月例会議
アイソトープ総合センター（鹿田6次）・大学院自然科学研究棟（津島岡大5次）調査報告書素案提出
男子学生寮予定地（津島岡大3次）調査報告書・センター報第7号進捗状況
3月27日　1992年度予算打ち合わせ

6　1991年度までの遺物収蔵量および保管体制

(1)　遺物収蔵量（表２）

1992年３月31日における本センターの遺物収蔵量は，鹿田遺跡第１・２次調査（医学部附属病院外来診療棟・NMR-CT室）：724箱，同第３・４次調査（医療技術短期大学部校舎他）：134箱，同第５次調査（医学部附属病院管理棟）：119箱，同第６次調査（アイソトープ総合センター予定地）：30箱，津島岡大遺跡第１次調査（NP-１）：４箱，同第２次調査（農学部合併処理槽・排水管）：18箱，同第３次調査（学生部男子学生寮予定地）：71箱，同第５次調査（大学院自然科学研究科棟）：89箱，同第６次調査（工学部生物応用工学科棟）：63箱，同第７次調査（同情報工学科棟）：13箱，同第８次調査（遺伝子実験施設）：14箱，その他の発掘及び試掘・立会調査（分布調査含む）：18箱，総計1297箱を数える。詳細は表２に挙げた。１箱の容量は約30ℓを目安としている。また，木器の中で大型水槽に保管のものについては１箱に換算して計算している。

(2)　管理・保管施設

本センターは，津島地区に管理・保管・収蔵等の主要施設を，そして鹿田地区には連絡所を置いている。津島地区では，本年度は，従来からの管理施設（面積は100㎡）と収蔵施設（延面積は300㎡：１・２階各150㎡）の他に，新たに木製品の保存処理室（面積は約39㎡）が加わった。収蔵施設は，主として，１階を遺物の洗浄等の作業場として一部を利用するとともに，遺物の保管室ならびに器材置き場とし，２階を常設展示室（約18㎡）・写真撮影室（約10㎡）・遺物整理室（約117㎡）として使用している。木製品の保存処理室は収蔵施設の西側に隣接して建設され，年度末に完成した。

鹿田地区の連絡所は，昨年度から引き続いて，旧混合病棟の東にある旧管理棟の二階の一室（約25㎡）にある。

今年度は新たな施設の設置があったため，使用総面積は，約464 ㎡となった。

(3)　遺物の保存処理

本学内の遺跡からは，その大半が沖積部に立地していることから，多数の木製品が良好な保存状態で出土している。精巧な加工品から杭まで様々な種類があるが，いずれも資料価値の高いものである。これらは水漬け状態でこれまで保存されてきたが，長期のものでは10年近い年月が経過しており，その保存状態は既に限界に達し，特に，ここ数年は劣化の進行が著しく，一日も早い恒久的保存処理の実施が必要となっていた。

そうした中で，1989年度に，縄文時代の貯蔵穴内から出土したアンペラ（津島第６次調査）の保存処理を元興寺保存科学研究所に委託することができたのに続き，本年度は，長年にわたる木製品の保存処理の要望がついに具体化することとなった。この計画では，保管中の木製品

表2　埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要

所属	種類	地区 調査名称	箱数（1箱：約30ℓ） 総数	土器	石器	木器	その他	サンプル	備考 主要時期・特殊遺物	文献
医病	発掘	鹿田1次調査 （外来診療棟）	608	491	6	60	1 ガラス 鉄器 銅鏃 他	50	弥生中期～中・近世 短甲状・櫂状木器等	⑦
〃	〃	鹿田2次調査 （NMR-CT室）	116	90	3	20		3	弥生後期～中世 田舟・木簡等	〃
医短	〃	鹿田3次調査（校舎）	131	36		90		5	古代～中世	⑩
〃	〃	鹿田4次調査（配管）	3	2				1	古代，鹿角製品	〃
医病	〃	鹿田5次調査 （管理棟）	119	79	1	20		19	弥生後期～中・近世	⑧
RI	〃	鹿田6次調査（アイソトープ総合センター）	30	29.5	0.5				中世，青銅製椀	⑰
	〃	津島岡大1次調査 （NP-1）	4			4			弥生中期～古代	③
農	〃	津島岡大2次調査 合併処理槽 排水管	18	7 6	1			4	縄文晩期～弥生前期	④
学生	〃	津島岡大3次調査 （男子学生寮）	71	49	10	2		10	縄文後期～弥生，古代～近世 石製指輪，蛇頭状土器片	⑲
〃	〃	津島岡大4次調査 （屋内運動場）	1	1					縄文晩期～弥生前期 ＜試掘調査遺物を含む＞	⑥
大自	〃	津島岡大5次調査 （自然科学研究科棟）	89	55	2			32	縄文後期～弥生，古代～近世 耳栓・木製櫛（縄文）	⑪ ⑰
工	〃	津島岡大6次調査 （生物応用工学科棟）	63	30	1	22		10	縄文後期～近世 人形木器，アンペラ	⑪ ⑭
〃	〃	津島岡大7次調査 （情報工学科棟）	13	7	1			5	縄文後期～近世	⑪
全	〃	津島岡大8次調査 （遺伝子実験）	14	12.9	0.1			1	縄文後期～近世	㉑
医病	試掘	鹿田　駐車場	1	1					弥生～中世	⑤
学生 教育	〃 〃	津島北　男子学生寮 〃　研究棟	1	0.7	0.3				縄文後期～弥生前期	〃
大自	〃	〃　自然科学研究 科棟	1	1					縄文後期～弥生前期	〃
事	〃	津島（土生）　外国人宿舎	1	1					縄文～中世	⑧
理	〃	津島北　身障者用エレベーター	0.3	0.3					中・近世	〃
教養	〃	津島南　〃	0.7	0.7					縄文・中世	〃
工	〃	津島北　校舎	1	1					縄文～近世	⑪
農薬	〃	津島南　動物・遺伝子実験施設	0.7	0.7					縄文～弥生，中・近世	〃

所属	種類	地区 調査名称	箱数（1箱：約30ℓ） 総数	土器	石器	木器	その他	サンプル	備考 主要時期・特殊遺物	文献
事	試掘	津島南　国際交流会館	0.3	0.3					中世	⑪
大自	〃	津島北　合併処理槽	0.2	0.2					中・近世	⑭
学生	〃	津島南　学生合宿所	0.4	0.2				0.2	中世	〃
教育	〃	津島北　身障者用エレベーター	0.3	0.3					縄文	〃
図	〃	〃　図書館	0.8	0.8					古墳～中世	〃
学生	〃	津島南　学生合宿所ポンプ槽	0.4	0.4					縄文～中世	⑰
資生	〃	倉敷　資源生物科学研究所	0.1	0.1					近世	〃
RI	〃	鹿田　アイソトープ総合センター	1	1					中世～近世	〃
事	〃	津島北　福利厚生施設	0.5	0.5					弥生？～中世	〃
全	立会	'83年度	2	2					分銅形土製品	①
〃	〃	'84年度	1	1						②
〃	〃	'85年度	1	1						⑤
〃	〃	'86年度	0.5	0.5						⑥
〃	〃	'87年度	0.5	0.5						⑧
	分布	'89年度 三朝・本島	0.3	0.3						⑭
全	立会	'91年度	1	1						㉑
総箱数			1,297	911.9	25.9	218	1	140.2		

※文献番号は附表3，4に対応する。文献㉑は本年報9を指す。

を専門的な外部機関に委託するものと本センターで独自に行うものとに分け，それぞれで処理を行うこととなった。前者は，本センターでは対応できないと判断されるものであり，1991年度・1992年度の2カ年計画で元興寺保存科学研究所に委託した。処理方法は木製品に応じてPEG含浸法とアルコール・キシレン法とが使い分けられる。独自に行なうものは，木製品の種類・材質等の状況や処理方法の検討から，施設を整えれば本センターにおいても保存処理が可能であると判断されるもので，委託費も参考にしつつ，今後の資料の増加も鑑み，新たにPEG含浸装置を設置し，一部の木製品の保存処理に対応することとなった。関連施設は年度末に完成し，1992年度から稼働する予定で環境が整えられた。　（山本）

注

(1) 木製品の保存処理方法およびPEG含浸装置について，篠原芳秀（広島県埋蔵文化財調査センター）・伊藤実（広島県立博物館）両氏から多大なご助言・ご教示を得た。また岡山県古代吉備文化財センターからも薬品等に関してご助言を得た。

第３章　1991年度活動のまとめ

本年度は，稲田孝司センター長が着任し，また助手２名と技術補佐員１名を加え，新たな体制で業務に臨むことができた。

発掘調査は，鹿田地区・津島地区で各１件ずつ行い，大きな成果をおさめた。昨年度に引き続いておこなったアイソトープ総合センター用地の鹿田遺跡第６次調査では，雨や湧水に悩まされながらも，３～４世紀（弥生時代末～古墳時代前期）の鹿田集落の西端部分の様子を初めて明らかにできた。７月に始まった農学部遺伝子実験施設新営に伴う津島岡大遺跡第８次調査でも，遺跡のうちこれまではっきりしなかった部分の状況を知ることができた。今後の調査の進展により，さらに多くの成果をあげることができよう。立会調査も随時おこなわれ，その都度，構内各所の土層堆積状況などを確認する機会を得たが，連絡の不徹底によるトラブルは本年度もまたなくすことができなかった。埋蔵文化財行政に対する理解を深めてもらうための広報活動へのより一層の取り組みは，依然として大きな課題のひとつである。

室内整理作業の成果としては，津島岡大遺跡第３次調査（学生部男子学生寮予定地）の調査報告書『津島岡大遺跡３』の発刊が特筆される。この調査では，とくに縄文土器を中心とする良好な遺物が得られたほか，弥生～明治時代にわたる各段階の水田面が検出されていたが，これらの資料をもとにした研究の成果も，報告書に盛り込むことができた。その他，本年度の刊行物としては，年報８およびセンター報第６・７号がある。こうした定期刊行物も規則正しく発刊できるような体制が整いつつある。

待望の木器処理施設も本年度に整い，稼働を始めた。これまで水漬けの状態で劣化を避けることのできなかった木製品も，出土年次の古いものから順次処理がおこなわれつつあり，その方面の憂いはほぼ解消することとなった。ただし，精巧なものや特殊なものは，専門の機関に処理を委託している。種子などを含むその他の有機質遺物についても，自然科学分野の研究者の方々に鑑定や研究の寄稿を頂いており，多大な研究成果が得られている。

従来おこなってきた展示会その他の普及啓蒙活動に関しては，昨年度までに一定の成果が得られたことや，本年度は調査研究分野のより一層の充実に主眼をおいたことなどから，とくに具体的な取り組みをしなかった。今後，新たな方針のもと，こうした分野の活動のあり方を模索していく必要があろう。ともあれ，本年度は人員・施設とも昨年度に比較して充実の方向へ進み，それを基礎とした新たな体制のもと，ほぼ満足できる活動成果が得られたのではないかと思う。

（松木）

附　　表

附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積(㎡)	文献	備考
1980	鹿　田	立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北	〃	文法経	合併処理槽埋設	〃			
	津島南 BD09 BC09～11	〃		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南 BD～BE04～07	〃		陸上競技場改修 （配水管埋設）	〃			
	鹿　田	〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃	〃	〃	動物実験施設新営	〃 岡山県教育委員会			試掘調査をせず破壊 残存壁面等の調査
	〃	〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃	〃	医	運動場改修	〃			
1982	津　島 AV06・10 AW05・14 AX08,BD07 BE10	試掘		排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認，協議
	小橋法目黒 津島北 AW14	発掘	法文	排水管集中槽（NP-1）埋設	岡山大学	24.0	③	＜津島岡大１次調査＞
	津島南	試掘	学生	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY15・16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿　田	〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃	〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃	立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿　田 AE～AN22 AE22～26	〃	歯	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

※文献１　光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会
　　２　河本　清「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会
　　③　番号は附表３の番号に対応する。

附表２　1990年度以前の構内主要調査（1983～1990年度）

附表２－(1)　発掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	鹿　田 AU～BD28～40	医病	外来診療棟新営	7.27～11.22 '84.1.9～3.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址 **＜鹿田１次調査＞**	⑦
	〃　BG～BI18～21	〃	NMR-CT室新営	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落址 **＜鹿田２次調査＞**	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	津島南 BE14・18 BF17・18,BG14 BH14・15	農	排水管埋設	'84.1.9～3.5	265	縄文時代晩期～弥生時代前期集落址 **<津島岡大2次調査>**	④
	〃 BH13	〃	合併処理槽埋設	11.14～11.22 '84.1.9～3.5	276	〃 ～ 〃 **<津2>**	〃
1984	鹿 田 AU～BD28～40	医病	外来診療棟新営	4.1～8.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址 **<鹿1>**	⑦
1986	〃 CN～CU27・28 CT～CY19～27 CX～DD16～25 DD～DG22・23	医短	校舎新営	6.2～11.29	2390	古代～中世の集落址 **<鹿田3次調査>**	⑩
	津島北 AV00,AW00・01	学生	男子学生寮新営	12.1～'87.3.31	1550	古代～近代の水田址 **<津島岡大3次調査>**	④
	津島南 BF・BG09	〃	屋内運動場新営	'87.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝，中世河道検出 **<津島岡大4次調査>**	〃
1987	津島北 AV00 AW00・01	〃	男子学生寮新営	4.1～6.18 8.24～9.5	1550 80	縄文晩期～弥生の集落址 縄文後期～晩期の河道，**<津3>**	⑲
	鹿 田 BB～BH35～42	医病	管理棟新営	10.6～'88.3.2 '88.3.23～3.31	1192	弥生中期後半～中・近世の集落址 **<鹿田5次調査>**	⑧
	〃 DD～DF25 DG～DI27・28	医短	校舎周辺の配管	11.2～11.21	30	古代の河道 **<鹿田4次調査>**	⑩
1988	津島北 AY06～08 AZ06・07	大	自然科学研究科棟	6.27～'89.3.19	1537	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の水田址 **<津島岡大5次調査>**	⑪
	〃 AV・AW04・05	工	生物応用工学科棟	9.20～'89.3.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の溝と水田址 **<津島岡大6次調査>**	〃
	〃 AV・AW05・06	〃	情報工学科校舎	10.12～ '89.3.31	800	縄文後・晩期集落址 弥生～近世水田址 **<津島岡大7次調査>**	〃
1989	津島北 AV・AW04・05	工	生物応用工学科棟	4.1～5.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 **弥生～近世の溝と水田址，<津6>**	⑭
1990	津島北 AY・AZ08	大	自然科学研究科棟	4.3～4.21	90	古墳時代後期溝 **<津5>**	⑱
	鹿 田BW～CC67～71	R I	アイソトープ総合センター	11.20～ '91.3.31	690	鎌倉時代溝・井戸・建物群 **<鹿田6次調査>**	〃

附表2―(2) 試掘調査など

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	津島南 BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	弥生時代前期土器片〈1983年度発掘調査〉	①
	〃 BE～BG14 BE・BH15 BE18,BF16～18	〃	排水管埋設予定地	2	〃 〃 〈 〃 〃 〉	〃
	〃 BF17	〃	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5		〃
	〃 BF22・23	〃	農場畜舎新営予定地	2～3	土器片出土 造成土0.6m 〈1987年度工事立会〉	〃
	〃 BC・BD15	事	大学事務局新営予定地	〃	土器片出土 〃 0.9m	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
	〃 BB10	学生	保健管理センター新営予定地	〃	溝検出　〃 0.8m	①
	〃 BI16	事	津島宿舎新営予定地	2	土器片出土　〃 0.9m ＜1987年度工事立会＞	〃
	津島北 AW05	工	校舎新営予定地	3	土器片出土　〃 1.0m	〃
1984	鹿　田 BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	中世土器・包含層確認，〃 0.5～0.7m ＜盛土保存＞	②
	〃 CT・CU25 CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部校舎新営予定地	2.7	中世・古代の遺物出土，〃 0.8～1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
1985	津島南 DE08	教養	講義棟予定地	3.5	遺構・遺物未確認　〃 1.2m ＜1986年度工事立会＞	⑤
	津島北 AX02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	縄文～弥生時代土器出土，造成土1.2m	〃
	〃 AV・AW99～01	学生	男子学生寮新営予定地	2～3	縄文～中世の遺構・遺物，〃 1.0m ＜1986年度発掘調査＞	〃
	鹿　田 AJ33,AI40 AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3	弥生～中世の遺物，〃 0.9～1.4m	〃
1986	津島南 BF・BG09	学生	屋内運動場新営予定地	2.4 1.2～1.7	弥生前期溝・中世河道検出，造成土1.1m ＜1986年度発掘調査＞	⑥
	津島北 AY・AZ07	大	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	縄文中期末～後期の遺構・遺物検出 造成土 0.6～0.8m ＜1988年度発掘調査＞	〃
1987	土　生 AP02	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	近世・弥生・縄文の遺構面確認	⑧
	津島北 AV11	情	情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	黒色土を標高2.2m前後で確認，遺構は未検出 造成土２m	〃
	〃 AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	近世・中世の遺物，中世・古代の水田址 造成土約１m ＜継続して発掘調査に及ぶ，小規模発掘＞	〃
	津島南 BD09	教養	〃	2.5	縄文時代土壙群を確認 縄文・中世・近世土器出土，造成土 0.7m ＜継続して発掘調査に及ぶ，小規模発掘＞	〃
1988	津島北 AX04・06，AW04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5	黒色土を標高３m弱で確認 溝状遺構・水田址検出，縄文～近世土器出土 ＜1988年度発掘調査＞	⑪
	津島南 BD18・19	農薬	動物実験飼育施設及び遺伝子実験施設	2.3	黒色土を標高約2.3mで確認 溝状遺構・縄文～中世遺物検出 造成土1.1～1.2m	〃
	〃 BC29	事	国際交流会館	2.5	近世・中世の遺物出土，造成土約1.2m ＜1988年度工事立会＞	〃
1989	津島北 AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	中世～明治の水田の畦畔・溝，造成土1.6～2m ＜1989年度工事立会＞	⑭
	津島南 BD02	学	学生合宿所予定地	2.0～3.2	縄文晩期～弥生前期の畦畔，造成土約１m ＜1989年度工事立会＞	〃
	〃 AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	縄文時代後～晩期の落込み 縄文時代後期～中世土器片，造成土0.8m ＜小規模発掘，面積38.5㎡＞	〃
	津島北 AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	古代水田，弥生～古代の溝，造成土1.4～1.6m	〃
1990	津島南BD02	学	学生合宿所ポンプ槽予定地	2.5	弥生時代前期畦畔 中世土器片	⑱

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1990	倉敷地区	資生	資源生物科学研究所遺跡確認調査	2.5	中世後半以降土器片	⑱
	鹿　田BY・BZ68	R I	アイソトープ総合センター予定地	2.3	中世土師質土器など ＜1990・91年度発掘調査＞	〃
	津島南AW・AX03	事	福利厚生施設予定地	3.9	弥生～古墳時代の溝 中世土器小片	〃

附表２－(3)　立会調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	東山	教育	附属中学校新営	4～5	シルト層中	①
	鹿　田 AR・AS38,BC40	医病	外来診療棟及び旧耳鼻科棟基礎杭保存状況確認調査	2.5～3		〃
	津島北 AX15	文	中庭水銀燈地下ケーブル埋設	0.7	造成土中	〃
	鹿　田 AY23	医病	旧中央診療棟埋設給水管修繕	1	〃	〃
	〃　AM32	〃	外来診療棟シールド取付に伴うアース線埋設	2		〃
	〃　DC39～42	〃	プール周辺植樹作業	0.7	造成土中	〃
	〃　AO～AW22	〃	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	弥生後期土器（分銅形土製品），貝集積	〃
	津島南 BC～BF18	薬	周辺排水用集中槽埋設 水道管埋設	2.5 1.5		〃
	津島北 BA13	事	西門橋梁改修	2.6		〃
	鹿　田 BH17～18	医病	混合棟北側ガス管埋設	1	造成土中	〃
1984	〃　BG・BH17・18	〃	NMR－CT室新設関係排水施設取付	0.6～1.5		②
	鹿　田 BD～BH64	医	旧基礎医学棟中庭駐車場整備	0.8		〃
	津島北 AW・AX11 AZ・BA12・13	情	通信用管路埋設	0.7～1.4	造成土0.9～1.2m	〃
	鹿　田 AE36	医病	外来診療棟新営関係電柱架設	1.95	〃　1.25m	〃
	〃　BQ33	〃	中診北病棟外来リカバリー室医療機器用取付	1.6	〃　1.5m	〃
	〃　BT21	〃	厨房棟東側埋設ガス管修繕	0.8	造成土中	〃
	〃　DB29	〃	看護婦宿舎前水道管修繕	2.0	中世包含層確認，中世・弥生式土器出土 造成土1.15m	〃
	津島南 BI16	事	非常勤講師宿泊施設新営	1.6	〃　1.0m	〃
	〃　BI15	〃	南宿舎合併処理槽取付	2.0		〃
	〃　BI15～17	〃	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0～2.2	溝・土壙検出，須恵器・弥生土器出土 造成土1.0m	②
	鹿　田 BA16～22	医病	外来診療棟関係ガス管引込み工事	1.2～1.4	ほとんど造成土	〃
1985	〃　AW～BH23 BH・BI24	〃	〃　屋外排水管埋設	1.3～1.7	造成土0.7～1.3m 中世・弥生の遺構，遺物確認	⑤
	〃　CR69	〃	看護学校構内水道メーター取設	1.0	造成土中	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1985	鹿　田 AK～AM43～46 AO～AT42 他	医	基幹環境整備給排水その他工事	1.0	造成土0.8m，近世土器溜り検出	⑤
	〃 AU～AW40 BA40～42	医病	基幹環境緑化工事，外来診療棟西	1.1	〃　〃，中世包含層確認	〃
	〃 AG34～36 AL～AN34～39 AU～AS39	〃	〃　，外来診療棟北	1.1	〃　〃，　〃	〃
	〃 BA22他	〃	基幹環境整備給排水その他工事	1.15	造成土1.0m	〃
	津島北 AV06・07	工	三次元棟新設および排水管埋設	1.5～1.7	〃 1.0～1.5m，土器細片出土	〃
1986	鹿　田 CS・CT19～24 CM～CU12・13 CR14,CU・CW15 CW・CZ16,CH33	医短	樹木移植	0.8～1.5	〃 1.0m	⑥
	〃 BI～BN45	医	排水・汚水管改修	0.8～1.3	〃 0.8m	〃
	津島南 BE08・09	教養	校舎新営	2.3	〃 1.3m，中・近世土器・溝検出	〃
	鹿　田 BV10,CY29 DD29,CK27 CL～CW26～29	医短	〃　設備	0.5～1.2	〃 0.8～0.9m	〃
	津島北 AU04・16・17 AV15	文	樹木移植	1.0～1.6	造成土内	〃
	〃 AV16・17	〃	グランド改修	3.5	造成土1.5m	〃
	津島南 BG08	学生	ハンドボールコート新設	0.2～2.0	〃 0.8m，黒色土確認	〃
	津島北 AX16	文	動物実験室新営	0.95	造成土内	〃
	鹿　田 CL～CR12 CR～CX13 CX～DA14	医短	護岸及び囲障工事	2.0	造成土0.8～1.0m，中世包含層	〃
	津島南 BF07・08	教養	校舎新営に伴う電気配管	1.8	造成土0.9m，中世包含層	〃
1987	鹿　田 BC37	医病	管理棟新営に伴う基礎杭確認	2.5	弥生時代包含層・遺構確認	⑧
	津島北 AY09	理	身体障害者用エレベーター設置伴う汚水管移設	1.2 一部1.6	造成土1m前後	〃
	津　島 AQ02・03	事	土生宿舎屋外排水管改修	0.7	〃 0.6m	〃
	津島北 AW01	学生	馬場東給水管修理	2.0	〃 0.96m，谷部分	〃
	鹿　田 CW14～17	医短	校舎新営　配管	1.3	〃 1.16m，中世水田層	〃
	〃 DC～DE23	〃	〃　〃	1.9	〃 1.1m，撹乱内	〃
	〃 CW16	〃	〃　樹木移植	1.2	〃　〃	〃
	〃 DF24 DG24～26	〃	〃　〃	1.6 3.0	〃　〃，中世層確認 〃　〃，撹乱内	〃
	〃 DD～DF24 DF23・24	〃	〃　〃	1.38 1.8	〃　〃 〃　〃，中世層確認	〃
	津島南 BF22・23	農	農場施設新営その他工事	1.8	〃 1.25m	〃
	〃 BG22	〃	〃　合併処理槽	3.6	〃 1.2m，自然流路内	〃
	〃 BE17～21	〃	〃　電気	0.7～1.5	〃　〃	〃
	〃 BE22	〃	〃　給排水	3.0	〃 1.3m	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1987	鹿田 BA17～21	医病	旧混合病棟北駐輪場基礎	0.6	造成土内，弥生土器出土	⑧
	〃 CM・CN30～43 CC～CN45～47	〃	道路排水整備	0.7～1.1	〃，深度1.1m地点のみ造成土65cm	〃
	〃 CH・CI56・57	医	動物実験施設焼却炉桝部掘削	1.0～1.2	造成土0.8m	〃
	〃 〃 〃	〃	〃 配管	0.3～1.0	〃 〃	〃
	〃 CM13～26 CN～CQ14 CP～CI14 CP～CI14	医病	脳代謝棟北給水管改修	0.8～0.9	〃 〃	〃
1988	津島北 AY11・AZ11	情	情報処理センター通信線付設	1.2	造成土0.8～0.85m	⑪
	鹿田 AE41,AJ・AO43 AV40	医病	管理棟新営に伴う電柱架設	1.6	造成土0.6m～1.4m	〃
	津島北 AZ06	大	大学院新営に伴う電柱架設	2.3	造成土0.8m	〃
	津島南 BF・BG10・11	教養	テニスコート夜間照明施設	2.2 1.4～1.5	黒色土を表土下約2mで確認 西に向かう落ちが推定される 造成土1.5m	〃
	〃 BC26	事	国際交流会館 本体部分	1.0 2.4～2.9	〃 1.5m	〃
	〃 BB25・26	〃	〃 電柱架設	1.7～1.9	〃 1m，以下は灰色粘土	〃
	〃 BB26	〃	国際交流会館 合併処理槽	2.2	造成土1.3m	〃
	鹿田 AY47	医	玄関付近外灯設置	1.0～1.3	造成土内	〃
	津島北 AU09・10	工	機械工学科・精密応用科学科実験棟電気改修	1.4～1.6	造成土1.4m	〃
1989	津島北 AZ09,BA・BB09	大自	自然科学研究科棟新営 電柱架設	1.8～2.2	造成土約1.0m	⑭
	〃 AZ08	〃	〃 工事用道路	1.4	弥生後期水田，近世溝検出	〃
	〃 AU04・05	工	生物応用工学棟新営 電柱架設	1.5～1.9	〃 0.7～1.2m	〃
	〃 AV06	〃	情報工学科棟地下部分掘削	6.0	標高-0.5まで掘削，遺物無	〃
	津島 BC02		市道拡幅補償工事 学生合宿所新営	1.2	造成土1.2m	〃
	〃 AY17	大自	合併処理槽 地質調査	2.3	造成土2.0m	〃
	〃 〃	〃	〃 本体部分掘削	3.0	＜1989年度試掘調査済＞	〃
	〃 BD05	学生	体育附属施設新営	1.4	撹乱内	〃
	津島北 AX・AY14,BA16	文	樹木移植	1.5	〃	〃
	鹿田 CO26・27	医病	旧管理棟解体に伴う配線移設	0.4～1.3	～近代水田層内	〃
	鹿田 CE31～43 CH34～37 CM31～44	〃	旧管理棟跡地環境整備 樹木移植	0.8～1.0	造成土内	〃
	〃 CE30・37・44 CJ・CK45 CL28・29 CM35・42	〃	〃 外灯基礎掘削	1.2～1.5 1.4	造成土0.7～1.0m 中世層確認 撹乱内	〃
1990	津島北 AZ・BA05	教育	エレベーター周辺排水管設置換	0.6～0.8	造成土内	⑱
	津島南 BB26	事	国際交流会館水銀灯設置	0.35	造成土内	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1990	〃　BC・BD04・05	教養	グラウンドシャワー室新営	1.5～1.2	造成土0.9～1.2m，条里名残？	⑱
	津島北 AV04～10		岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅰ	0.4～3.0	造成土0.6～1.4m，黒色土層・条里溝？	〃
	〃　AV・AW04・06	工	生物応用工学棟・情報工学棟外構	1.3	造成土～近世層上層	〃
	〃　AY・AZ06～08	大自	総合大学院自然科学研究棟外構工事及び付設工事	0.5～2.5	造成土内～近世層 石垣石材（水路？）	〃
	〃　AW～BA12～16 津島南 BC～BE14～16	図	付属図書館周辺整備関連樹木移植等	0.5	造成土内	〃
	鹿　田 BY～CS60～80			1.2	造成土0.7m	〃
	〃　BY～CS60～80	医	ＲＩ給水管敷設換え	0.6～0.8	明治層上面	〃
	津島南 BB14	事	事務局敷地内排水溝修繕	0.3～1.5	造成土0.8m	〃
	津島北 AV01～03,AT03		岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事Ⅱ	0.7～1.5	造成土0.7～0.8m 東端で条里の名残？	〃
	津島北 BA14・16	文法経	南側用水石積み改修	1.1	造成土内 陸軍の土塁カット	〃

※　発掘・試掘調査については全てを，立会調査については主要なもののみを対象としている。
　　文献番号は附表３・４に対応する。

附表 3　埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名　　称	発行年月日
①	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1　1983年度	1985年 2 月28日
②	岡山大学構内遺跡調査研究年報 2　1984年度	1985年 3 月30日
③	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 1 集	1985年 5 月 7 日
④	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ（農学部構内BH13区他） 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 2 冊	1986年 3 月31日
⑤	岡山大学構内遺跡調査研究年報 3　1985年度	1987年 3 月31日
⑥	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4　1986年度	1987年10月31日

附表 4　埋蔵文化財調査研究センター刊行物

番号	名　　称	発行年月日
⑦	鹿田遺跡Ⅰ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 3 冊	1988年 3 月31日
⑧	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5　1987年度	1988年10月31日
⑨	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 1 号	1988年10月
⑩	鹿田遺跡Ⅱ 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 4 冊	1990年 3 月31日
⑪	岡山大学構内遺跡調査研究年報 6　1988年度	1989年10月14日
⑫	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 2 号	1989年 8 月
⑬	〃　第 3 号	1990年 2 月
⑭	岡山大学構内遺跡調査研究年報 7　1989年度	1990年11月20日
⑮	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 4 号	1990年 7 月
⑯	〃　第 5 号	1991年 3 月
⑰	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 6 号	1991年 8 月
⑱	岡山大学構内遺跡調査研究年報 8　1990年度	1991年12月
⑲	津島岡大遺跡 3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第 5 冊	1992年 3 月31日
⑳	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報　第 7 号	1992年 3 月

附　表

附表１　1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	遺跡名 調査地区名	種類	所属	調査名称	調査組織	調査面積(㎡)	文献	備考
1980	鹿　田	立会	歯	同附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8.0		
1981	津島南 BD 26	〃	農	寄宿舎新営	〃			
	津島北	〃	文法経	合併処理槽埋設	〃			
	津島南 BD 09 BC 09～11	〃		基幹整備（共同溝取付）	〃			
	津島南 BD ～ BE 04～07	〃		陸上競技場改修 （配水管埋設）	〃			
	鹿　田	〃	医病	高気圧治療室新営	〃			
	〃	〃	〃	動物実験施設新営	〃 岡山県教育委員会			試掘調査をせず破壊 残存壁面等の調査
	〃	〃	〃	病理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃	〃	医	運動場改修	〃			
1982	津　島 AV 06･10 AW 05･14 AX 08, BD 07 BE 10	試掘		排水基幹整備	〃			津島 AW 14区で弥生時代包含層を確認，協議
	小橋法目黒 津島北 AW 14	発掘	法文	排水管集中槽（NP-1）埋設	岡山大学	24.0	③	**〈津島岡大１次調査〉**
	津島南	試掘	学生	武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	津島北 AY 15･16	〃	法経	校舎新営	〃	7.0		
	鹿　田	〃	医	標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃	〃	医病	外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃	立会	医	動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山県教育委員会		1	
	鹿　田 AE ～ AN 22 AE 22～26	〃	歯	電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

※文献１　光永真一「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会
　　２　河本　清「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13　1983　岡山県教育委員会
　　③　番号は附表３の番号に対応する。

附表２　1989年度以前の構内主要調査（1983～1989年度）

附表２－(1)　発掘調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(㎡)	備考	文献
1983	鹿　田 AU～BD28～40	医病	外来診療棟新営	7.27～11.22 '84.1.9～3.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址 **〈鹿田１次調査〉**	⑦
	〃　BG～BI18～21	〃	NMR-CT室新営	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世集落址 **〈鹿田２次調査〉**	〃

附　表

年度	調査地区名	所属	調査名称	期間	面積(m²)	備考	文献
1983	津島南 BE14・18 BF17・18,BG14 BH14・15	農	排水管埋設	'84.1.9～3.5	265	縄文時代晩期～弥生時代前期集落址 **〈津島岡大2次調査〉**	④
	〃 BH13	〃	合併処理槽埋設	11.14～11.22 '84.1.9～3.5	276	〃 ～ 〃 **〈津2〉**	〃
1984	鹿　田 AU～BD28～40	医病	外来診療棟新営	4.1～8.31	2188	弥生時代中期後半～中・近世集落址 **〈鹿1〉**	⑦
1986	〃 CN～CU27・28 CT～CY19～27 CX～DD16～25 DD～DG22・23	医短	校舎新営	6.2～11.29	2390	古代～中世の集落址 **〈鹿田3次調査〉**	⑩
	津島北 AV00,AW00・01	学生	男子学生寮新営	12.1～'87.3.31	1550	古代～近代の水田址 **〈津島岡大3次調査〉**	④
	津島南 BF・BG09	〃	屋内運動場新営	'87.1.19～1.22	70	弥生時代前期溝，中世河道検出 **〈津島岡大4次調査〉**	〃
1987	津島北 AV00 AW00・01	〃	男子学生寮新営	4.1～6.18 8.24～9.5	1550 80	縄文晩期～弥生の集落址 縄文後期～晩期の河道，**〈津3〉**	⑧
	鹿　田 BB～BH35～42	医病	管理棟新営	10.6～'88.3.2 '88.3.23～3.31	1192	弥生中期後半～中・近世の集落址 **〈鹿田5次調査〉**	〃
	〃 DD～DF25 DG～DI27・28	医短	校舎周辺の配管	11.2～11.21	30	古代の河道 **〈鹿田4次調査〉**	〃
1988	津島北 AY06～08 AZ06・07	大	自然科学研究科棟	6.27～'89.3.19	1537	縄文後・晩　の貯蔵穴と河道 弥生～近世の水田址 **〈津島岡大5次調査〉**	⑪
	〃 AV・AW04・05	工	生物応用工学科棟	9.20～'89.3.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の溝と水田址 **〈津島岡大6次調査〉**	〃
	〃 AV・AW05・06	〃	情報工学科校舎	10.12～ '89.3.31	800	縄文後・晩期集落址 弥生～近世水田址 **〈津島岡大7次調査〉**	〃
1989	津島北 AV・AW04・05	工	生物応用工学科棟	4.1～5.31	600	縄文後・晩期の貯蔵穴と河道 弥生～近世の溝と水田址，**〈津6〉**	⑭

附表2－(2)　試掘調査など

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	津島南 BH13	農	合併処理槽予定地	2.5	弥生時代前期土器片〈1983年度発掘調査〉	①
	〃 BE～BG14 BE・BH15 BE18,BF16～18	〃	排水管埋設予定地	2	〃 〃〈 〃 〃 〉	〃
	〃 BF17	〃	排水管中間ポンプ槽予定地	3.5		〃
	〃 BF22・23	〃	農場畜舎新営予定地	2～3	土器片出土　造成土0.6m 〈1987年度工事立会〉	〃
	〃 BC・BD15	事	大学事務局新営予定地	〃	土器片出土　〃 0.9m	〃
	〃 BB10	学生	保健管理センター新営予定地	〃	溝検出　〃 0.8m	〃
	〃 BI16	事	津島宿舎新営予定地	2	土器片出土　〃 0.9m 〈1987年度工事立会〉	〃
	津島北 AW05	工	校舎新営予定地	3	土器片出土　〃 1.0m	〃

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1984	鹿　田 BU30・31	医病	西病棟北側受水槽予定地	1.4	中世土器・包含層確認，〃 0.5～0.7m 〈盛土保存〉	②
	〃 CT・CU25 CZ19・20・23・24	医短	医療短期大学部 校舎新営予定地	2.7	中世・古代の遺物出土，〃 0.8～1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
1985	津島南 DE08	教養	講義棟予定地	3.5	遺構・遺物未確認　〃 1.2m 〈1986年度工事立会〉	⑤
	津島北 AX02	教育	研究棟予定地	2.6～3.4	縄文～弥生時代土器出土，造成土1.2m	〃
	〃 AV・AW99～01	学生	男子学生寮新営予定地	2～3	縄文～中世の遺構・遺物，〃 1.0m 〈1986年度発掘調査〉	〃
	鹿　田 AJ33,AI40 AJ・AK26	医病	外来診療棟環境整備工事に先立つ範囲確認調査	2.2～3	弥生～中世の遺物，〃 0.9～1.4m	〃
1986	津島南 BF・BG09	学生	屋内運動場新営予定地	2.4 1.2～1.7	弥生前期溝・中世河道検出，造成土1.1m 〈1986年度発掘調査〉	⑥
	津島北 AY・AZ07	大	自然科学研究科棟新営予定地	1.6～3.2	縄文中期末～後期の遺構・遺物検出 造成土0.6～0.8m 〈1988年度発掘調査〉	〃
1987	土　生 AP02	事	外国人宿舎建設予定地	2.2～2.8	近世・弥生・縄文の遺構面確認	⑧
	津島北 AV11	情	情報処理センター新営予定地	2.0～3.0	黒色土を標高2.2m前後で確認，遺構は未検出 造成土2m	〃
	〃 AY09	理	身体障害者用エレベーター建設予定地	3.0～3.5	近世・中世の遺物，中世・古代の水田址 造成土約1m 〈継続して発掘調査に及ぶ，小規模発掘〉	〃
	津島南 BD09	教養	〃	2.5	縄文時代土壙群を確認 縄文・中世・近世土器出土，造成土0.7m 〈継続して発掘調査に及ぶ，小規模発掘〉	〃
1988	津島北 AX04・06,AW04	工	校舎建設予定地	2.0～3.5	黒色土を標高3m弱で確認 溝状遺構・水田址検出，縄文～近世土器出土 〈1988年度発掘調査〉	⑪
	津島南 BD18・19	農 薬	動物実験飼育施設 及び遺伝子実験施設	2.3	黒色土を標高約2.3mで確認 溝状遺構・縄文～中世遺物検出 造成土1.1～1.2m	〃
	〃 BC29	事	国際交流会館	2.5	近世・中世の遺物出土，造成土約1.2m 〈1988年度工事立会〉	〃
1989	津島北 AZ17	大自	合併処理槽設置予定地	4.0	中世～明治の水田の畦畔・溝,造成土1.6～2m 〈1989年度工事立会〉	⑭
	津島南 BD02	学	学生合宿所予定地	2.0～3.2	縄文晩期～弥生前期の畦畔，造成土約1m 〈1989年度工事立会〉	〃
	〃 AZ・BA05	教育	身体障害者用エレベーター	2.5	縄文時代後～晩期の落込み 縄文時代後期～中世土器片，造成土0.8m 〈小規模発掘，面積38.5m²〉	〃
	津島北 AV・AW13	図	図書館新営予定地	3.0	古代水田，弥生～古代の溝,造成土1.4～1.6m	〃

附表2－(3)　立会調査

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	東山	教育	附属中学校新営	4～5	シルト層中	①
	鹿　田 AR・AS38,BC40	医病	外来診療棟及び旧耳鼻科棟基礎杭保存状況確認調査	2.5～3		〃

附　表

年度	調査地区名	所属	調査名称	掘削深度(m)	備考	文献
1983	津島北 AX15	文	中庭水銀燈地下ケーブル埋設	0.7	造成土中	①
	鹿　田 AY23	医病	旧中央診療棟埋設給水管修繕	1	〃	〃
	〃　AM32	〃	外来診療棟シールド取付に伴うアース線埋設	2		〃
	〃　DC39～42	〃	プール周辺植樹作業	0.7	造成土中	〃
	〃　AO～AW22	〃	外来診療棟蒸気配管埋設	1.3	弥生後期土器（分銅形土製品），貝集積	〃
	津島南 BC～BF18	薬	周辺排水用集中槽埋設 水道管埋設	2.5 1.5		〃
	津島北 BA13	事	西門橋梁改修	2.6		〃
	鹿　田 BH17～18	医病	混合棟北側ガス管埋設	1	造成土中	〃
1984	〃　BG・BH17・18	〃	NMR－CT室新設関係排水施設取付	0.6～1.5		②
	鹿　田 BD～BH64	医	旧基礎医学棟中庭駐車場整備	0.8		〃
	津島北 AW・AX11 AZ・BA12・13	情	通信用管路埋設	0.7～1.4	造成土0.9～1.2m	〃
	鹿　田 AE36	医病	外来診療棟新営関係電柱架設	1.95	〃　1.25m	〃
	〃　BQ33	〃	中診北病棟外来リカバリー室医療機器用取付	1.6	〃　1.5m	〃
	〃　BT21	〃	厨房棟東側埋設ガス管修繕	0.8	造成土中	〃
	〃　DB29	〃	看護婦宿舎前水道管修繕	2.0	中世包含層確認，中世・弥生式土器出土 造成土1.15m	〃
	津島南 BI16	事	非常勤講師宿泊施設新営	1.6	〃　1.0m	〃
	〃　BI15	〃	南宿舎合併処理槽取付	2.0		〃
	〃　BI15～17	〃	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	1.0～2.2	溝・土壙検出須恵器・弥生土器出土 造成土1.0m	②
	鹿　田 BA16～22	医病	外来診療棟関係ガス管引込み工事	1.2～1.4	ほとんど造成土	〃
1985	〃　AW～BH23 BH・BI24	〃	〃　屋外排水管埋設	1.3～1.7	造成土0.7～1.3m 中世・弥生の遺構，遺物確認	⑤
	〃　CR69	〃	看護学校構内水道メーター取設	1.0	造成土中	〃
	〃　AK～AM43～46 AO～AT42他	医	基幹環境整備給排水その他工事	1.0	造成土0.8m，近世土器溜り検出	〃
	〃　AU～AW40 BA40～42	医病	基幹環境緑化工事，外来診療棟西	1.1	〃　〃，中世包含層確認	〃
	〃　AG34～36 AL～AN34～39 AU～AS39	〃	〃　，外来診療棟北	1.1	〃　〃，　〃	〃
	〃　BA22他	〃	基幹環境整備給排水その他工事	1.15	造成土1.0m	〃
	津島北 AV06・07	工	三次元棟新設および排水管埋設	1.5～1.7	〃　1.0～1.5m，土器細片出土	〃
1986	鹿　田 CS・CT19～24 CM～CU12・13 CR14,CU・CW15 CW・CZ16,CH33	医短	樹木移植	0.8～1.5	〃　1.0m	⑥

岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定

（設　置）

第１条　岡山大学（以下「本学」という。）に岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センターという。）を置く。

（目　的）

第２条　センターは，本学の敷地内の埋蔵文化財について，次の各号に掲げる業務を行い，もって埋蔵文化財の保護をはかることを目的とする。

一　埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

二　発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。

三　埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成に関すること。

四　その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

（センター長）

第３条　センターにはセンター長を置く。

２　センター長は，専門的知識を有する本学の教授の中から学長が命ずる。

３　センター長は，センターに関する業務を掌理する。

４　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（調査研究室）

第４条　センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

２　調査研究室に室長，調査研究員及びその他必要な職員を置く。

３　室長は，専門的知識を有する本学の教官の内から学長が命ずる。

４　室長は，センター長の命を受け，センターの業務を処理する。

５　室長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

６　調査研究員及びその他の職員は，上司の命を受け，センターの業務に従事する。

（調査研究専門委員）

第５条　センターに，センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため，調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。

２　専門委員は，本学の教官の内から学長が命ずる。

３　専門委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。

（管理委員会）

第６条　本学に，センターの管理運営の基本方針を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

２　管理委員会に関する規定は，別に定める。

（運営委員会）

第７条　センターに，センターの運営に関する具体的な事項を審議するため，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

２　運営委員会に関する規定は，別に定める。

（事　務）

第８条　センターの事務は，施設部企画課において処理する。

（雑　則）

第９条　この規定に定めるもののほか，センターに関し必要な事項は，学長が別に定める。

附　則

１　この規定は，昭和62年11月26日から施行する。

２　この規定施行後最初に任命されるセンター長，室長及び専門委員の任期は，第３条第４項，第４条第５項及び第５条第３項の規定にかかわらず，昭和64年３月31日までとする。

○設定理由

岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の発掘調査などの業務を行い，もって埋蔵文化財の保護を図るため，学内施設として，新たに岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを設置すること及びその組織等必要な事項について定めるため。

2　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会規定

（趣　旨）

第１条　この規定は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定（昭和62年岡山大学規定第48号）第６条第２項の規定に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）に関し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　管理委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針その他重要な事項を審議する。

（組　織）

第３条　管理委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　学長
二　各学部及び教養部長
三　自然科学研究科長
四　資源生物研究所長
五　附属図書館長
六　各附属病院長
七　地球内部研究センター長
八　学生部長
九　医療技術短期大学部主事
十　事務局長
十一埋蔵文化財調査研究センター長

（委員長）

第４条　管理委員会に委員長を置き，学長をもって充てる。

２　委員長は，管理委員会を召集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（幹　事）

第６条　管理委員会に幹事を置き，庶務部長，経理部長及び施設部長をもって充てる。

（庶　務）

第７条　管理委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

附　則

この規定は，昭和62年11月26日から施行する。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの管理運営の基本方針等を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター管理委員会に関し，必要な事項を定めるため。

3　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定

（趣　旨）

第１条　この規定は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規定（昭和62年岡山大学規定第48号）第７条第２項に基づき，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関　し，必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　運営委員会は，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関

する具体的な事項を審議する。

（組　織）

第３条　運営委員会は，次の号に掲げる委員で組織する。

一　埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二　本学の教授のうちから学長が命じた者若干名

三　センターの調査研究専門委員から学長が命じた者１人

四　センターの調査研究室長

五　施設部長

２　前項第２号の任期は，１年とし，再任を妨げない。

（委員長）

第４条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

２　委員長は，運営委員会を召集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

（庶　務）

第６条　運営委員会の庶務は，施設部企画課において処理する。

附　則

１　この規定は，昭和62年11月26日から施行する。

２　この規定施行後最初に任命される第３条第１項第２号の委員の任期は，同条第２項の規定にかかわらず，昭和64年３月31日までとする。

○設定理由

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの運営に関する具体的な事項を審議するためにおく岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会に関し，必要な事項を定めるため。

1991年度埋蔵文化財調査研究センター組織

1　センター組織一覧

＜学　長＞　高橋　克明

管理委員会

＜埋蔵文化財調査研究センター長＞……（併・文学部教授）　稲田　孝司

運営委員会

＜調査研究専門委員＞

千葉　喬三（農学部教授）

＜調査研究室長＞……（併・文学部助教授）新納　　泉

＜調 査 研 究 員＞……（専・文学部助手）　阿部　芳郎（7月1日から）

富樫　孝志

土井　基司

松木　武彦

山本　悦世

（技 術 補 佐 員）　内田　　恵（10月1日から）

＜室 内 作 業 員＞……恩藤　富子，片山　純子

萩野　早苗

2　管理委員会

委　員

学　　長	高橋　克明	教養部長	脇本　和昌
文学部長	好並　隆司	自然科学研究科長	富永　久雄
教育学部長	松浦　正義	資源生物科学研究所長	河崎　利夫
法学部長	藤井　俊雄	附属図書館長	萬成　　勲
経済学部長	橋本　博之	医学部附属病院長	大月　三郎
理学部長	山口　恒夫	歯学部附属病院長	山下　　敦
医学部長	木村　郁郎	地球内部研究センター長	松井　義人

歯学部長	足立　明	医療技術短期大学部長	喜多嶋康一
薬学部長	田坂　賢二	学生部長	長堀　金造
工学部長	河野伊一郎	事務局長	大谷　利治
農学部長	中村怜之輔	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田　孝司

幹　事

庶務部長	石川　秀夫	経理部長	大久保輝男
施設部長	渋谷　政利		

審議事項

1991年５月16日　1990年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会委員について
1990年度事業について
1991年度埋蔵文化財調査研究センター予算について
1991年度事業計画について

1991年９月13日　人事について

3　運営委員会

委　員

文学部教授	稲田　孝司(センター長)	農学部教授	千葉　喬三(調査研究専門委員)
文学部教授	狩野　久	教養部教授	定兼　範明
教育学部教授	髙重　進	文学部助教授	新納　泉(調査研究室長)
工学部教授	本田　和男	施設部長	渋谷　政利

審議事項

1991年５月９日　1990年度埋蔵文化財調査研究センター決算について
1991年度埋蔵文化財調査研究センター予算について
調査研究員の新規採用について
1991年度事業計画について

1991年12月10日　遺伝子実験施設・合併処理槽予定地発掘調査（津島岡大遺跡第８次調査）の進行について

附　編

相模野第Ⅳ期前半における集団関係の予察

－茂呂系ナイフ形石器の検討から－

富　樫　孝　志

Ⅰ．はじめに

相模野台地はローム層が発達しており，野川・月見野両遺跡の発掘調査以後，多くの良好な石器群が層位的に検出されている。そして，Ⅰ～Ⅴ期に時期区分され，相模野編年として知られている[(1)]。近年，第Ⅲ期終末から第Ⅴ期にかけての時期，層位的には第２黒色帯上部からハードローム層にかけて，尖頭器を含む石器群が検出され，ナイフ形石器文化から尖頭器文化に至る石器群の動態の研究が盛んに行われている。その研究の主流は，文化論的研究[(2)]，尖頭器の出現に関する研究[(3)]，技術構造論[(4)]といった分野に分けることができる。特に技術構造論は稲田孝司氏が唱えて以来[(5)]，尖頭器文化の成立，尖頭器の出現とも絡んで常に問題視されてきた分野である。

これらの研究は尖頭器，あるいは尖頭器を含む石器群の変遷といった，遺物そのものの研究に終始してきており，良好な尖頭器の接合資料が不足している現状では，こうした研究もそろそろ限界に近づいている感がある。こうした中で，激しい動態を示す当該期の石器群の背後にある社会・集団に言及した研究はほとんどなされていないのが現状である。社会・集団に踏み込んだ研究がなされて初めて尖頭器文化の本質的な評価ができるのではないか。

相模野台地の集団に言及した代表的な研究としては近藤義郎氏の研究がある[(6)]。近藤氏はブロック，ブロック群，遺跡，遺跡群といったさまざまなレベルでの検討から，日常の狩猟・採集生活を行い，普遍的に存在した血縁的小集団を単位集団と設定し，相模野台地内ではこうした単位集団が集団群を形成し，近隣の集団群との間に同族的関係を保持していたとしている。

矢島國雄氏は相模野第Ⅳ期までの遺跡の分布は各中小河川の流域に均等に分布するのに対し，次の第Ⅴ期になり，尖頭器が石器組成の主体を占める時期になると，特定河川の特定の流域に集中する傾向があり，こうした変化はそれまで存在していた集団が再編成されていく過程としてとらえられることを示唆している[(7)]。

両氏の研究を考え合わせると，尖頭器文化の成立にあたって，それまで普遍的に見られた集団関係に大きな変化が生じたのではないかという，重要な問題が浮かびあがってくる。これが具体的にどのような変化であったのかを解明することは，尖頭器文化成立の本質的な評価に関わる極めて重要な課題である。そして，それを解明するには，前段階として，ナイフ形石器文

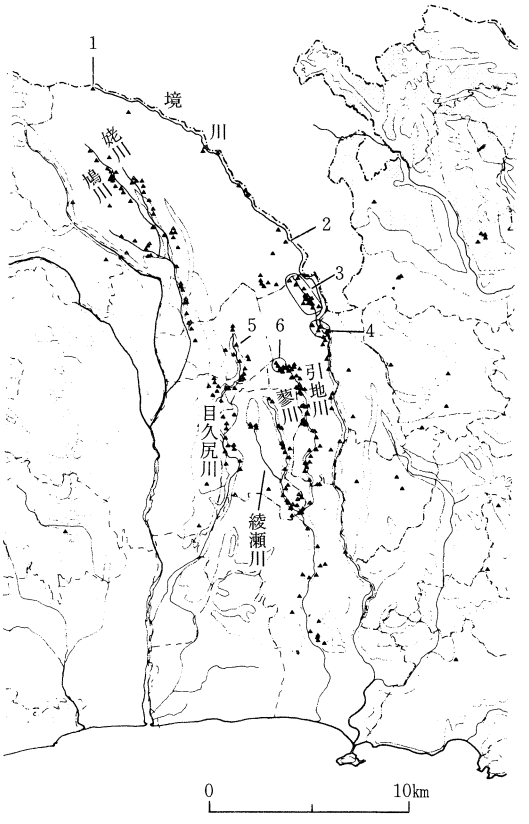
化の終末期における集団関係を把握することが不可欠であろう。

そこで，本稿では相模野第Ⅳ期前半における集団関係の把握を，以下のような方法で試みることにする。

集団把握の手段としてはさまざまな方法が考えられる。最も有効な方法は，主要石材，技術構造，石器組成などを総合的に検討することであろう。相模野第Ⅳ期前半の特徴としては，次の点が周知のところである。在地石材を主要石材としており，石刃技法を技術基盤とし，茂呂系ナイフ形石器を製作している。石器組成の点ではナイフ形石器が主体であり，これにスクレイパー，彫器などが加わり，数点の尖頭器を含む場合がある。以上の点は各遺跡に共通して認められる点である。こうした点を前提として，１つの台地内における，集団関係の把握となると，当該期ではナイフ形石器の属性分析が１つの有効な手段であると考えられる。ナイフ形石器の属性分析では集団，さらには個人レベルにまで迫ることが可能であるが[(8)]，当該期のナイフ形石器のほとんどは茂呂系ナイフ形石器として理解できる。茂呂系ナイフ形石器は一様に石刃を素材としているため，型式的把握が容易であり，その製作技法に一定の差異が認められれば，それは集団差を反映している可能性がある。具体的な実践例としては砂川遺跡における安蒜政雄氏の研究がある[(9)]。安蒜氏の視点は茂呂系ナイフ形石器を製作する際の石刃の用い方，すなわち，打点をナイフ形石器の先端側にもってくるか，基部側にもってくるか，また，刃部が左側にくるか，右側にくるか，といった点である。ナイフ形石器を個別にこうした視点で検討していくと，Ａ地点では打点を石器の基部側に設定するものが多いのに対し，Ｆ地点では打点を石器の先端側に設定するもが多いという，それぞれ逆の傾向が現れる。この差を安蒜氏は単位集団差としてとらえている。このように，石器の機能に関係しないと思われる属性には集団差が現れやすいと考えられるから，こうした視点は有効であろう。本稿でもこうした視点で，茂呂系ナイフ形石器の属性分析を試みることにする。本稿で検討する属性は以下の通りである。ナイフ形石器を正位置においたときの素材の打点の上下，二側縁加工のナイフ形石器に関しては，基部の形態，すなわち尖らせるか，丸みをもたせるかである。これらはナイフ形石器の機能に関係ない属性であると考えられ，定量分析を行うことで有意な差が抽出できると思われる。なお，刃部の左右に関しては，栗原中丸遺跡で，ナイフ形石器の各形態を通じて左側にするものが優位を占める傾向が認められた以外は，各遺跡，ナイフ形石器の各形態ごとに，かなりのばらつきが見られ，優位な傾向を示さなかったので，集団差を反映する属性ではないと判断し，検討項目からはずした。

Ⅱ．遺跡分布と拠点的遺跡の立地

神奈川県における遺跡の分布は周知のように相模野台地に集中している（図15）。最近になって，丹沢山地といった山間部にも旧石器時代の遺跡が発見されてきているが，相模野台地



1　橋本遺跡　3　月見野遺跡群　5　上草柳遺跡群
2　中村遺跡　4　長掘遺跡群　6　栗原中丸遺跡

図15　相模野台地における遺跡分布図
(注10文献を改変)

中小河川の流域に集中していることは一目でわかるが，さらに次のような特徴を指摘できる。各中小河川の中流域から上流域，標高でいえば40ｍから90ｍの間に集中している。ただし，鳩川，姥川流域だけは標高100ｍ付近にまで及んでいる。このような集中域は日常生活圏として考えることができるであろう。これは南北10数km，東西数kmの範囲で，民族例に見られるように１つの集団の日常生活圏を半径数kmの円内とすると，この範囲に居住していた単位集団群の数は５つを越えることはないであろう。

こうした日常生活圏内に分布する遺跡の中で，規模の大きな遺跡[11]は分布域の北端，すなわち，川の上流に位置している。川の上流，特に水源地付近でいくつかの川が集まってくる所に大規模遺跡が形成される要因は，栗島義明氏によって明解に説明されている[12]。すなわち，日常生活は河川沿いを上流にさかのぼったり，あるいは下流に下ったりするような移動を伴うもので，河川の水源地付近はそうした移動の折り返し地点にあたる。こうした所は各集団が必ず通る場所であり，必然的に大規模遺跡や遺跡群が形成されるとしている。相模野台地では，栗原中丸遺跡[13]，橋本遺跡[14]，また，川の中流域ではあるが，さきに設定した日常生活圏の最上流域に位置する長堀遺跡群[15]がこれにあたると考えられる。また，個々の遺跡の規模は大きくないが，河川の水源地付近に遺跡群を形成している上草柳遺跡群[16]や月見野遺跡群[17]もこれにあたるであろう。このような各集団が共通して居住したと考えられる遺跡は，各々の集団色が凝縮していると考えられ，まずはこうした遺跡で出土した茂呂系ナイフ形石器を検討することで，当時の集団の把握を試みたい。

Ⅲ．各遺跡での茂呂系ナイフ形石器の分析

具体的な検討にはいる前に茂呂系ナイフ形石器の形態分類をしておく。茂呂系ナイフ形石器の形態分類はいくつか考えられるが，ここでは以下のように分類する（図16）。

Ａ類：二側縁加工で，茂呂型と称されるものである。

B類：一側縁全体に加工が及んでいるものである。

C類：素材の先端の一側縁のみに加工がとどまるものである。

D類：素材の一端を断ち切るように加工を施したものである。

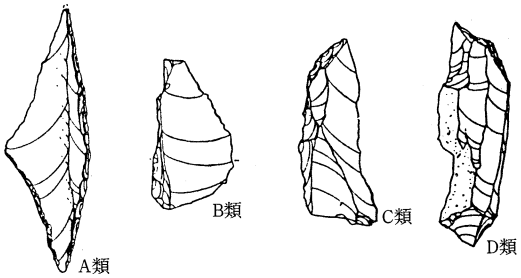


図16　茂呂系ナイフ形石器の形態分類（注13文献より）

	打面の向き		基部の形態	
A類	上(58)	下(18)	尖(38)	丸(22)
B類	上(14)	下(4)		
C類	上(6)			
D類	上(45)	下(12)		

図17　栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層における茂呂系ナイフ形石器の属性

1．栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層

栗原中丸遺跡は目久尻川の水源地付近に位置しており，他に綾瀬川，蓼川，引地川といった河川が集まってくる地理的環境にもある。第Ⅴ文化層では3000点を越える遺物が出土しており，ブロック数は65を数える神奈川県内でも屈指の大規模遺跡である。この遺跡での母岩別資料や接合資料の分布などから，それぞれのブロックは７つのブロック群に分けることができ，しかもそれらは時間差をもって残されたことが考えられている。こうしたことから，この遺跡は何回もの居住によって残されたことが考えられる。さらに言えば，栗島氏によって指摘されているように[18]，目久尻川，綾瀬川，蓼川，引地川といった河川沿いに移動生活していた集団がくりかえし居住した場所と考えられる。

まず，茂呂系ナイフ形石器全体について各属性を見ると，図17のようになる。各形態を通じて打面は上，基部は尖らせるものが優位を占めている。石刃は統一的な平面観のみならず，反りが少なく，打面から末端まで厚さが極端に恋化しないといった側面観にも技術的特徴がある。したがって，石刃からナイフ形石器を製作する場合，打面を先端側，末端側のいずれかにも設定できると考えられる。こうした二者択一的な属性を無意識に選択した場合，確率論的には両者がほぼ同数になるはずであるが，このようにどちらか一方に偏りが生じている場合は，やはり意図的な選択があったと考えるのが妥当であろう。次にこれらの傾向がが文化層全体に共通してみられるのかどうか検証してみる。ブロック単位で検討してみると，各ブロックで出土したナイフ形石器は数点づつではあるが，やは打面は上，基部は尖らせるものが優位を占める傾向がうかがえる。さらに，母岩別資料の共有関係などから，近似した時期に同一集団によって残されたと考えられるブロックどおしをブロック群としてまとめてみるとこうした傾向は一層

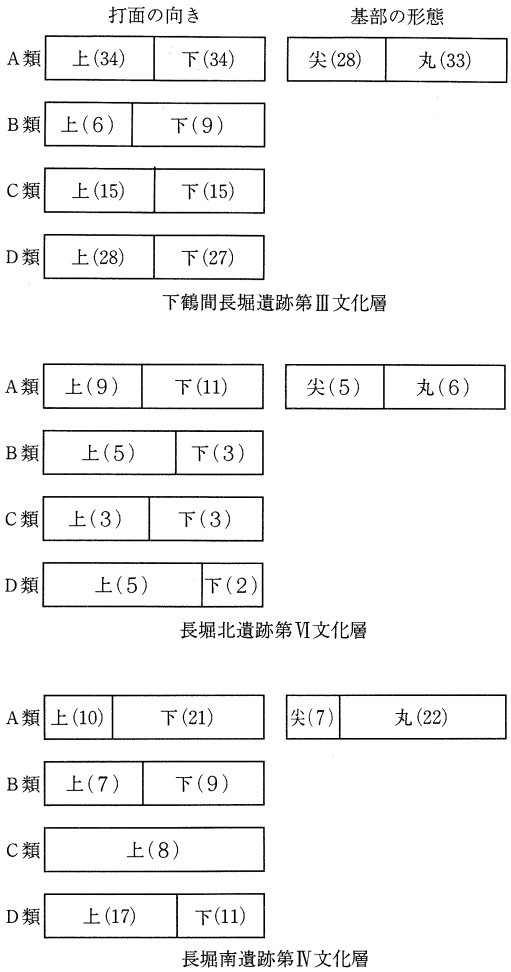


図18　長堀遺跡群における茂呂系ナイフ系石器の属性

明確になる。

以上の検討から，栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層における茂呂系ナイフ形石器製作の特徴として次の点を指摘できる。

・各形態を通じて，石刃の打面を先端側に設置するものが圧倒的に多い。

・A類においては基部を尖らせるものが多い。

なお，D類においては素材の一端を折断するので，打面を上にもってくることは，刃部の作出と打面の除去という２つの製作上の意義を持っていたことが考えられる。

こうした特徴を集団の保持していたナイフ形石器製作上の規範ととらえるならば，目久尻川，綾瀬川，蓼川，引地川といった河川流域に１つの集団が存在していた可能性がある。この集団は，栗原中丸遺跡で同時存在と考えられるブロック数が数ブロックであることから，単位集団，あるいは単位集団群のレベルを越えるものではないであろう。

２．長堀遺跡群

長堀遺跡群は境川中流域，標高70ｍ台に位置している。本稿では資料が公表されている下鶴間長堀遺跡第Ⅲ文化層，長堀南遺跡第Ⅳ文化層，長堀北遺跡第Ⅵ文化層を対象とする。下鶴間長堀遺跡第Ⅲ文化層では，出土遺物の総点数は4,000点をはるかに越え，ブロック数は16を数える。長堀南遺跡第Ⅳ文化層では遺物総点数は2,000点近く，ブロック数は27を数える。長堀北遺跡第Ⅵ文化層では遺物総点数は300点ほどでブロック数も４つであるが，下鶴間長堀遺跡と近接しており，同一遺跡である可能性も考えられる。前２者の遺跡は境川流域では最大規模の遺跡であり，調査の粗密もあろうが，これより上流にさかのぼると遺跡数は激減する。これらのことから，長堀遺跡群は河川の水源地に形成された大規模遺跡，あるいは遺跡群と同様な性格をもった遺跡であることが考えられる。下鶴間長堀遺跡では母岩別資料の分布から全体を２つのブロック群に分け，さらにナイフ形石器のブロック間移動から，２つのブロック群

に時間差が考えられている。また，長堀南遺跡ではブロック間における母岩別資料の分布状況などは明らかにされていないが，接合資料の分布が１ないし２ブロック内で完結することや，各ブロックにおける主要石材の違いなどから，数ブロックごとがブロック群としてまとまる可能性が高く，この遺跡も複数回居住によって残されたことが考えられる。

茂呂系ナイフ形石器について，栗原中丸遺跡と同様な検討を行った結果を図18に示す。点数の関係でＢ類の検討はできない。Ａ類において，下鶴間長堀遺跡と長堀北では，打面の上下，基部の形態には偏りがないが，長堀南遺跡では打面を下にするものが多い傾向を示している。Ｃ・Ｄ類については，下鶴間長堀遺跡では打面の上下は等数づつみられる。長堀南遺跡では打面を上にする傾向が認められる。長堀北遺跡では点数が少なく検討できないが，全体として，下鶴間長堀遺跡，長堀北遺跡と長堀南遺跡では，違った傾向を示すようであり，異なる集団が居住した可能性が考えられる。なお，下鶴間長堀遺跡の２つのブロック群間では同様の傾向を示していることから，同一集団によって残された可能性が高い。

以上のことから，下鶴間長堀遺跡における茂呂系ナイフ形石器の製作上の特徴として次の点を指摘できる。

・Ａ類では，打面の位置，基部の形態については２つの属性がそれぞれ等数づつ見られる。

・Ｃ・Ｄ類では，打面の位置は上下ほぼ等数ずつ見られる。

長堀北遺跡では，Ａ類については下鶴間長堀遺跡と同様の特徴を示す。

長堀南遺跡における茂呂系ナイフ形石器の製作上の特徴としては次の点を指摘できる。

・Ａ類は打面を下，すなわちナイフ形石器の基部側に設定する傾向があり，基部は丸みを持たせる傾向がある。

・Ｃ・Ｄ類については，打面を上にする傾向がある。

以上の検討から，ナイフ形石器の製作について，栗原中丸遺跡とは違った特徴が指摘でき，また，下鶴間長堀遺跡，長堀北遺跡と長堀南遺跡でも違った特徴が認められた。これは同一の集団が何等かの原因で居住した場所によって違った方法でナイフ形石器を製作したと考えるよりは，ナイフ形石器の製作に関して別の規範をもった集団を考えた方が適当であろう。

３．橋本遺跡第Ⅲ文化層

橋本遺跡は境川の上流，水源地から少し下流に下った所に位置している。出土遺物は2,600点程で，ブロック数は明らかにはされていないが，報告書を見る限り，20を下ることはないであろう。黒曜石の分布が調査区の北半に集中する傾向があり，主要石材である珪岩は３ケ所程に強い集中をみせ，ここには黒曜石製の石器がほとんど分布していない。また，接合資料は遠距離で接合するものはないなど，これらのブロックが同時に残されたとは考えにくい状況が認められる。やはり，複数回居住によって残されたと考え方が妥当であろう。さて，橋本遺跡に

	打面の向き		基部の形態	
A類	上(26)	下(43)	尖(29)	丸(32)
B類	上(9)	下(13)		
C類	上(3)	下(8)		
D類	上(12)	下(19)		

図19　橋本遺跡第Ⅲ文化層における茂呂系ナイフ形石器の属性

居住した集団の主要な日常生活域はどこに考えられるであろうか。境川流域では，先に検討したように，長堀遺跡群よりも上流では遺跡数が激減する。橋本遺跡の近隣で遺跡が濃密に分布しているところは，橋本遺跡よりも5㎞程南下した所の鳩川，姥川流域である。ここでは遺跡の調査例が少ないこともあろうが，今のところ，当該期の規模の大きい遺跡は発見されていない[19]。下久沢山谷遺跡[20]が，鳩川の水源地付近に位置しており，発掘調査もなされているが，後述するように石刃技法，茂呂系ナイフ形石器が明確ではないため，ここでは検討からはずすことにする。さらに，鳩川，姥川の水源地が橋本遺跡と5㎞程の距離であることも考えあわせると，鳩川，姥川流域に居住した集団が橋本遺跡を拠点とした可能性は考えられるであろう。したがって，当遺跡を検討することで，境川上流域，鳩川，姥川流域に居住した集団に言及できるのではなかろうか。図19に橋本遺跡の茂呂系ナイフ形石器の検討結果を示す。打面の位置については，各形態を通じて下にするものが優位を占めている。基部の形態については，尖らせるものと丸みをつけるものが等数づつ認められる。これらのことから，橋本遺跡の茂呂系ナイフ形石器の製作技法において次の点を指摘できる。

・いづれの形態においても打面を下，すなわち，ナイフ形石器の基部に設置する傾向がある。

・A類の基部の形態は尖らせるものと丸みをつけるものと等数づつある。

こうした検討から，特に打面の位置に関して，先に検討した栗原中丸遺跡，長堀遺跡群とは違った傾向が出ていることから，これらの遺跡に居住した集団とは別の集団が居住した可能性がある。

以上のように，各拠点的遺跡と考えられる遺跡ごとに茂呂系ナイフ形石器の属性，素材である石刃の用いかた，基部の形態について検討を加えてきた。その結果，各拠点遺跡ごとに違った傾向が認められ，それらは集団差を表している可能性が考えられた。

4．その他の遺跡

河川の中流域に分布するその他の遺跡についてはどうであろうか。上記で行ったような検討を同様に行うことで，拠点的遺跡間で想定した集団差をさらに検証したいところであるが，ほとんどの遺跡は小規模で，出土したナイフ形石器の点数も少数である。これは，各集団が短期間の居住をくりかえしていたためと思われる。定量分析に耐えうる点数のナイフ形石器を出土しているのは中村遺跡[21]のA類のナイフ形石器くらいである。参考までに中村遺跡での検討結果を図20に示す。C地区では打面を下にするものがやや優位を占めている。D～F地区では，打

面を上にするものと下にするものとが等数づつ認められる。基部の形態については基部を丸く仕上げるものが優位を占めており，長堀遺跡南でみられた傾向と同様である。これらのことから，少なくとも中村遺跡C地区に居住した集団は長堀遺跡群に居住した集団と同じ集団に属していた可能性が高いと考えられる。

	打面の向き		基部の形態	
C地区	上(22)	下(33)	尖(10)	丸(35)
D～F地区	上(21)	下(21)	尖(8)	丸(32)

図20　中村遺跡第Ⅴ文化層における茂呂系ナイフ系石器の属性

月見野遺跡群は目黒川流域に立地した，当該期においては極めて重要な遺跡であるが，全貌が明らかではないので，ここでは検討を控えておく。

Ⅳ．考察

以上検討してきたことをまとめながら，相模野第Ⅳ期前半における集団関係についての考察を行う。

相模野台地においては中小河川中流域に遺跡が分布し，標高では40～70m，100m付近に集中していた。そして，河川の水源地付近には複数回居住によって残されたと考えられる大規模遺跡や遺跡群が形成されていた。その他の遺跡は遺物の出土点数の少ない，短期間の居住によると思われる遺跡がほとんどであった。こうしたことから，移動の形態としては，中小河川沿いに短期間の居住を繰り返しながら，中流から上流にかけて移動し，水源地付近で折り返すといった回帰移動が考えられる。こうした想定のもとに，水源地付近に形成された拠点遺跡は各集団が共通して居住した所であり，集団色が凝集されているであろうと考え，茂呂系ナイフ形石器の属性分析から集団色の抽出を試みた。その結果，各拠点遺跡ごとに違った傾向をみせ，４つの集団が存在する可能性を指摘できた。それらは以下のとおりである。

１つ目は栗原中丸遺跡に居住した集団で，目久尻川，綾瀬川，蓼川，引地川を主要な居住域としていた集団であると考えられた。２つ目と３つ目は下鶴間長堀遺跡と長堀北遺跡に居住した集団と長堀南遺跡に居住した集団で，ともに境川を居住域としていたと思われる。４つ目は橋本遺跡に居住した集団で，境川上流域，鳩川，姥川を居住域としていたと思われる。このように見てくると，それぞれの集団が独自の居住域をもち，基本的にその居住域内で移動生活をしながら共存していたような状況がうかがえる。もちろんこのような独自の居住域内でのみ１年間の生活のすべてがまかなえたとは考えにくいが，逆に複数の集団が近接して居住することは土地の生産性を低めることになり，結局は移動，分散を余儀なくされるであろう。拠点遺跡以外の遺跡での出土遺物の点数や，ブロック数などから，また，拠点遺跡内でも同時存在が考えられるブロックは数ブロックであることなどから，いづれも短期間の居住が考えられた。このことは土地の生産性の低さを物語るものであり，やはり，複数集団が近接して居住することは困難であったと考えられる。各集団がこうした危険を避けるために，おのづと独自の居住域

を形成したのであろうか。

今後の課題

今回は茂呂系ナイフ形石器のみに焦点をあてて検討したが、相模野第Ⅳ期前半は尖頭器の出現期でもあり，尖頭器を含めた検討が不可欠である。これは非常に重要な問題を含んでいると思われるので，稿を改めたい。同様な検討を武蔵野台地においても行い，比較検討することも重要であろう。また，時期をさかのぼって，こうした集団関係の系譜を探ることも必要であろう。こうした検討を経て，南関東における尖頭器文化成立の新しい評価ができるものと考える。

さて，以上，検討した遺跡以外に，当該期において石刃技法，茂呂系ナイフ形石器を明確に保有しない遺跡が認められる。先にあげた下久沢山谷遺跡の第Ⅱ文化層の他に代官山遺跡第Ⅴ文化層[22]がこれにあたる。これらの遺跡では，幅広の縦長剥片剥離技術を主体とし，その剥片の打面を基部側に設定し，打面を残す幅広のナイフ形石器を主体的に製作している。こうした剥片剥離技術，ナイフ形石器は相模野第Ⅳ期後半に認められるもので，層位的には，第１黒色帯上部で出土するものである。これらの２遺跡は出土層位は第１黒色帯中部であり，相模野第Ⅳ期前半に含まれるが，石器群の内容から相模野第Ⅳ期後半に含める考えもある[23]。相模野第Ⅳ期後半になると，一部の遺跡を除いて，箱根産と思われる粗悪な黒曜石が主要石材となってくるが，代官山遺跡第Ⅴ文化層では，在地石材が主体で，使用している黒曜石は長野県産と思われる比較的良質のものである。こうしたことから，相模野第Ⅳ期後半に含めるには，主要石材の問題も解決しなければならない。筆者は，今のところはこの２遺跡を相模野第Ⅳ期前半に含めておきたい。そうすると，この２遺跡の石器群は，今回検討した諸遺跡とは石器群の内容の違いが大きく，社会・集団論的な説明が必要になる。わずか２遺跡のみで１つの集団を設定するには論が飛躍しすぎる感がある。微妙な時期差が存在するのか，集団差なのか，これも重要な今後の課題である。

最後になりましたが，本稿を作成するにあたって，稲田孝司先生には研究方法などに関して様々な御教示をいただいた。新納泉先生，絹川一徳氏には日頃より御指導をいただいている。阿部芳郎，土井基司，松木武彦，山本悦世の諸氏には勉強会などを通じていろいろと討論していただいた。また，資料収集などに関しては次の方々の御世話になった。

相田薫，織笠昭，織笠明子，白石浩之，土井永好，御堂島正

以上の方々に厚く御礼申し上げます。

注

1）矢島國雄・鈴木次郎「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第１号　1979年

2）例えば次のような研究がある。
栗島義明「槍先形尖頭器石器群の研究序説―中部日本における地域的様相の把握―」『考古学研究』第32巻第4号　1986年
織笠昭「相模野尖頭器文化の成立と展開」『大和市史研究』第13号　1987年

3）例えば次のような研究がある。
中村喜代重「相模野台地における槍先形尖頭器の出現について」『旧石器考古学』第36号　1988年

4）例えば次のような研究がある。
鈴木次郎「ナイフ形石器石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現―相模野第Ⅳ期石器群の構造的理解―」『神奈川考古』第22号　1986年

5）稲田孝司「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第15巻第3号　1969年

6）近藤義郎「先土器時代の集団構成」『考古学研究』第22巻第4号　1976年

7）矢島國雄「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察」『考古学研究』第23巻第4号　1977年

8）角張淳一「黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズム―後期旧石器時代石器群の行動的理解―」『先史考古学論集』第1集　1991年

9）安蒜政雄「砂川遺跡についての一考察―個体別資料による石器群の検討（2）―」『史館』　第9号　1977年

10）神奈川県立埋蔵文化財センター『かながわ考古学第1集　神奈川県下における主要遺跡の分布とその問題点』1990年

11）ここでは次のような遺跡を大規模遺跡として扱う。出土遺物の総点数1000点以上，検出ブロック数10基以上

12）栗島義明「先土器時代遺跡の構造論的研究序説」『土曜考古』第11号　1986年

13）大上周三，鈴木次郎編『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター　1984年

14）橋本遺跡遺跡調査団『橋本遺跡Ⅵ』橋本遺跡調査会　1984年

15）麻生順司編『長堀南遺跡発掘調査報告書』大和市北部処理場建設予定地内遺跡調査団

16）中村喜代重編『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』大和市教育委員会　1984年

17）明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団『概報月見野遺跡群』　1969年

18）注12参照

19）中村喜代重「神奈川県相模原市下久沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』第7号　1979年によれば，姥川の水源地付近に位置する四ツ谷遺跡が規模が大きいことが予想され，第1黒色帯より，剥片，スクレイパーを採集しているようであるが，詳細は明らかでない。

20）注17文献

21）伊藤恒彦，中三川昇，大坪宣雄編『中村遺跡』中村遺跡発掘調査団　1987年

22）上田薫，砂田　弘編『代官山遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター　1984年

23）注4の文献では下久沢山谷遺跡第Ⅱ文化層を相模野第Ⅳ期後半に位置づけている。

1992年12月21日　印刷
1992年12月21日　発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報 9　1991年度

編集　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
発行　岡山市津島中３丁目２番１号
(086)252-1111(内線246)
印刷　サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2
(08669)3-2121㈹